

2019年6月

Japan Society of
the Graded Direct Method
and Basic English

Year Book

No. 71

内 容

ベーシック・イングリッシュと英語教育	相沢 佳子	2
スタート目前の小学校英語科～その言語材料と言語活動～	松浦 克己	10
<i>The Basic English Reading Books</i> より 'A DOG FIGHT' L. W. ロックハートのBasic English運用術	松川 和子	15
Básic Englishと自修本としての ' <i>English through Pictures</i> '	後藤 寛	20
岡本篤氏の授業 ～高校1年生に対する疑問詞+to不定詞の指導～	吉沢 郁生	32
支部活動報告（東日本支部&西日本支部）		40
編集後記		43

発行：GDM 英語教授法研究会／日本ベーシック・イングリッシュ協会 編集：山崎典子
東日本支部 〒226-0005 神奈川県横浜市緑区竹山3-1-8-3102-233 加藤准子方 Tel/Fax：045-934-8314
西日本支部 〒567-0034 茨木市中穂積1-5-B-605 此枝洋子方 Tel：080-8167-1993

<http://www.gdm-japan.net/>

ベーシック・イングリッシュと英語教育

相 沢 佳 子

GDM 教授法はベーシックを言語材料として Richards が開発した効果的な入門期の英語の教え方である。これはベーシックの教育面への応用であり、ベーシックを使ったからこそ GDM が可能であって、この両者は切り離すわけにはいかない。ベーシックの組織そのものが simple, clear, economical, regular, easy で、これらは英語教育に必須な要件でもある。今までも語られてきたことだが、今回改めてベーシックの特質を英語教育の面からみてみたい。

Ogden はベーシック考案に際し、その目的を 3 つあげている。1) 国際補助語として世界中の人が平等に、共通に使える意思伝達的手段として、2) 外国人の英語学習の第一歩、普通英語への橋渡しとして、3) 英語を母語とする者には思考の明晰化をと。現在英語は世界中で一番広く使われ、事実上すでに国際語となっている。2 番目の入門期の英語教育への活用が最重要となる。ベーシックはわずか 850 語、それでも「英語の小宇宙」と言われるように普通英語の一部、しかもその核心的部分である。これを基盤にしてそこから普通英語 full English へスムーズに進めるようになっていく。思考の明晰化は分析的ではっきりしたベーシックを使うことで得られる副産物であり、私たちにとってもこれは有益である。

850 語で何でも表現でき、統語的にも簡素、規則的で分かり易く、しかも現に使われている普通英語に合致しているというすばらしい小英語を作り出した Ogden とはどんな人物だろうか。彼自身まれにみる博学多才で、ベーシック考案の他にも、心理学、哲学など幅広く奥行き深く研究して数々の業績を残している。忙しい仕事をしながら、フランス語、ドイツ語などから英語への翻訳も 15 冊ほどしている¹⁾。彼には特に rephrase、同じことを違うことばで言い換えるという類まれな才能があって、しかもそれを楽しんでやっていたとのこと²⁾。

ベーシックは Ogden 自身のまれにみる才能と彼の英語や言語科学の深い理解によって可能になった。彼は多数の知識人の考え、本など莫大な量の資料から多くを吸収してそれらの知恵を融合していた。私たちが使っていることばの多くはもっと基礎的な要素のことばで簡素化できる、また disembark には get off a ship が、bachelor には unmarried man など表に現れている形の裏に複数の要素が隠れているということばの仕組みを理解していた。また英語そのものの特性、特に英語の分析性また品詞転換が自由であることなどに気づいて、それを活用したことはすばらしい。ただベーシックが最終的に出来上がるまでの苦労は並大抵のものではなかった³⁾。

1930 年ベーシック公表後 Ogden はその教え方、学び方について *ABC of Basic English*, *Basic Step by Step*, *System of Basic English* など何冊も書いて、それらを教本にベーシックを広く普及させることに努めた。5 年ほど後には日本を始め世界 30 ヶ国にベーシックの代表がおかれ、そこを中心に各地で普及運動が行われた。戦時中の困難を経て、その後一時期ヨーロッパの国々で息を吹き返して活動は続いたが、現在ではベーシックの影は薄れている。ただ 2003 年にアメリカの工学者たちが net 上にベーシックの組織を立ち上げ、大々的に広い範囲で活動をしている⁴⁾。

ベーシックの公表当時、日本での英語教育は効率が悪く、ベーシックに新しい期待がかけられて初代代表の岡倉吉三郎などによる熱心な普及活動が見られた。しかし実際には英語教育の場でベーシックが広く使われたことはなかった。それから90年ほどたち、その間言語学、語学教育の進歩は目覚ましく、また教育機器の開発も活発に行われた。それに英語に直接接する機会も飛躍的に増えた。それでも現在英語のレベルは格段に伸びたと言えるだろうか。

使える英語、発信用の英語が求められている現在、英語教育でも話す、書く力をつけることが重視されている。それには多くの語をやみくもに覚えることより、少なくとも本当に基本的な語を自分の物にして使いこなせるようにしておくことは効果的である。確かにベーシックには回りくどい、古めかしいなどの欠点もある。ただ何らかの形でベーシックを利用することは英語教育にとって効果的な方法の一つではないだろうか。そこでベーシックの特質を英語教育の面から考えていこう。

1) 語数が850と少ない

ご存知のように、ベーシック考案の発端はOgdenとRichardsの『意味の意味』定義論の執筆中にあった。実際にいろいろな語を定義してみると、どんな語を定義しても少数の同じことばが繰り返し出てくることに2人は気づいた。この事実は少数のこのような要素的な語で多くの語の意味を表せるような英語の体系が可能だろうということを示していた。つまりベーシックの基盤となる原理はどんな意味を定義、説明するにも人の使う概念の数は驚くほど少ないということ。学習用の英々辞書LDCEも8万以上の語や句をわずか2,000の基礎的、なじみのある語で定義している。語の意味を記述的に定義するとは代用、説明ともいえるが、意味を分解して易しいことばで言い直すことである。

外国語学習では語をたくさん覚えることが暗黙のうちに要求されてきた。ただ無制限に覚えることは不可能だから、どれを教えるかは大きな問題だ。語はそれぞれ使われている中で働きの量と質が異なっている。苦勞して覚えても以後あまり出番のない語ではもったいない。一般の教育用語彙はほとんど統計上の頻度を基準に選ばれている。ベーシックは頻度からではなく、働きの大きい語、つまり適用範囲も広く重要度の高い基礎的な、他の語を代用できるような語から成っている。しかも850語は高度に系統だった有機的組織となっている。語は単独だけでなく他の語との組み合わせで大きな働きをする。これらの語は結果的に人間の基本的な感情、思考、社会生活での情報伝達に不可欠な語でもある。

何よりもことばは思考の道具であるとの前提のもとに、ベーシックでは機械的な暗記ではなく考えて学ぼうになっている。暗記は最小限に、その代わり想像力を働かせて考えることが重要になる。ベーシックでは「覚える英語」ではなく「考える英語」と言われる所以である。語彙が限られているので、意味を分析的に考えてより具体的に表現する。日本人学習者はどうしても英語と日本語を単語レベルで結びつける傾向がある、onは「上」、「いつも」はいつでも*always*と（以後ベーシックにない語は斜体に）。ベーシックでは1対1の語の対応が出来ないことが多いので、このようなことはおこらない。

少ない語彙で済ますには語の意味を分解して、またはより応用範囲の広いgeneralな語で表す。内容をくわいて言えば*breeze*はsoft wind, *fragrance*はsweet smell, *scarlet*はdark redなどとなる。より一般的な語を使う例では*difficult*よりhardが、*easy*よりsimple, *shape*よ

り formの方が応用範囲は広い。ぴったりしたことばが思いつかない時、何も言えないよりはベーシック的な general な語でもとっさに使えることは大切である。cheerful, satisfied, delighted など思いつかなくても、ひとまずは happy ですむ。中でもベーシックでは分解という技法が他の語の代用をするのに最も一般的である。この 850 語は後に語彙を増やす基盤になっている。これら他の語を代用する力の大きい語を十分に習得して自分の物にしておけば、英語の発信には大きな力となる。

2) 動詞はわずか 16 語

ベーシックの語表の右下に次のように記されている，“It is possible to get all these words on the back of a bit of notepaper because there are no ‘verbs’ in Basic English”。動詞のない英語などありえない。ただここでは‘一般の動詞’を排除したからこそ一枚の紙に収まるような少数の語のベーシックが可能になったと述べている。これはベーシックの最も顕著な特質である。動詞は一般にむずかしい、不規則動詞では変化形を覚えるなど。また何より動詞は文形成の要なので、どの動詞を使うか、またそれにより文中での他の要素（目的語、補語、また前置詞句など）の選択や配置も考える必要がある。また一般の動詞には単純な動作以外に enter には in (to) が、stroll には slowly がなど方向や様態、原因などの要素が隠れている。これら一般動詞について Bentham はウナギのようにヌルヌルしていてつかみにくいと形容している。

多くの動詞の中に一にぎりだけ特殊な働きをする動詞群があることは一般には余り気づかれていない。ベーシックではいわゆる一般の動詞をすべて排除して、16 語だけを operators (操作詞) としている。この名称は 16 の動詞が名詞など他の語を‘操作’して文を作り上げる働きが大きいことを示している。語の具体的な意味内容は比較的軽く (delexical)⁵⁾、文形成の働きが主である。この 16 語だけでも他の語と結びついて多くの一般動詞の意味を表すことが出来る。

逆に言えば、一般動詞の多くは内容を分解すればこれら 16 の動詞と他の語の結びつきになることが多い。代表的には方向や位置を表す前置詞、副詞などと結び ascend は go up, descend は go down, extract は take out, insert は put in などと。これらの結びつきで約 4,000 語の一語動詞の代用ができるとのこと。その他形容詞などと共に clarify は make clear, extinguish は put out, prepare は get ready と。名詞と結んで cry は give a cry, believe は have belief, breathe は take a breath, 前置詞句と結んで ask は put a question, appear は come into view, forget は put out of mind などと。ただしこれは先にも述べたが、分析的な英語だからこそ可能であって、フランス、イタリア、スペイン語など他のインド・ヨーロッパ系の語では不可能である⁶⁾。

16 の動詞には 3 つの大きな特徴がある。1) 普通英語でも不可欠な動詞で、どんな英語の文章でも中心的役割を担っている。2) 状態を表す be, have, seem, なくても済む say, see, send 以外の動詞 come, go, get, give, put, take, make, keep, let, do はすべて人の身体の単純な動作、手指を使っての操作を表している。それだけ分かり易い。3) これらの動詞は単純、規則的、分かり易く、透明な文の型を作り上げる。透明というのは文構造を通して実際の動作(文の意味)が、また逆に実際の動作から文構造が透いて見えるということ。学習者は文と場面(人の動作など)のつながりを一緒にして見える形で学べる。わずか 16 語のこれら基本動詞の使い方をしっかり身に付けておくことは英語教育に極めて重要だ。動詞がこれだけ削減で

きたことから Ogden は他の語も同じように減らしてベーシックという小英語の組織を作り上げた。

3) くり返しの学習

語数が少ないことは必然的にそれらを繰り返し使うことになり、結果的にその意味合いや用法が徹底して身につく。英語の中の核の部分でもあるこれらの語の用法に慣れておくことはその後の学習にとっても非常に重要である。特に2) で述べたように文構成に最も必要な動詞を学習初期にこの16語のような基本的なものに限って繰り返し使ってしっかり習得すれば、英語の文生成の力はかなりしっかり身に付く⁷⁾。いろいろな語句との結びつきなども徹底して学べるし、英語の文を作るのに非常に効果的である。

4) 分解的な表現

今まで述べたようにベーシックではむずかしい、あいまいな語をくだけて易しい語で表す。ベーシックに言い直すことを vertical paraphrase (垂直訳) と言っているが、それは語を同じ水平のレベル(単語と単語)ではなく、一段と具体的な事実に近いレベルに下げての言い方で表すことから。語数が少ないので、普通英語や日本語の1語をベーシックの1語では表せないことが多い。そこで脈略を考えて内容をくだけていくつかの語で表す。これは語には固定した決まった意味があるという迷信、誤解を解く。この誤りは『意味の意味』の中で Ogden らが注意を喚起した「ことばの魔術」の一つでもある。

そのためにはまず元の文が何を言っているかよく考えなくてはならない。これは面倒ではあるが、よい思考の訓練になる。先にも述べたように、日本人学習者はとかく英語と日本語を1対1で覚えがちだが、それを避けるためにもベーシックの方式は有効である。ベーシックを知らない人たちは *raise* は put up と、*accelerate* は go more quickly と言い換えられるだろうか。

5) 語の意味がはっきり決まっている

ベーシックでは語数が制約されているだけではなく、使われる意味もまた限定されて決まっている。多くの英語の辞書では頻度順に意味が記されている。よく使われる基本的な語ほど多義、つまり意味の数は多い。take は大型の辞書では40近い意味が出ている。多くの意味をやたらに覚えるのは無駄で、それよりまず大元になる意味をはっきりつかんでおくことが重要である。ベーシックではそこから他の意味がスムーズに派生する大元の意味 root sense がはっきり決まっていて、それを元にそれから拡大、特殊の用法などが定められている⁸⁾。このように root sense をはっきりつかんでおくことは、そこから派生した意味も分かり易く非常に重要である。

6) 最適な学習順位

語数が少なくまた意味もはっきりしているからこそ、教えるのに最も効果的な順位がたてられる。最も基本的、具体的、規則的で単純なことを先ず定着させてから複雑な難しいものに進むという有機的順序である。ベーシックはその成立過程で英語の構文、語の意味の移り変わりを徹底的に分析し、そこから学習順位を科学的に設定した。語なら今述べた root sense をしっ

かり習得してから拡大した意味, メタファーや idiom へ進むように。文にしても容易な文を習得してから複雑な文へと。

Richards は「普通の英語とベーシックの間に境界線はない。それをへだてているのは teaching line だけで, それは What should come before what だ⁹⁾」と言っている。先に習ったことを生かして次に進む, 過去に習ったことが最大限生かされるように。彼の唱える feedforward の考えである。GDM ではその名称からも段階順序付けが見事になされて, 学びやすくなっている。語数や意味に制約がなければ, テキストでの語の表出順位を考えることはむずかしい。ある検定教科書で take は Take a picture という文の中で最初に出てくる, これは take の比喩的意味なのに。

7) 具体的で視覚化が容易

ことばは本来私たちが指し示すことができる物の世界を扱う道具だと Ogden は主張している。ベーシック 850 語のうち 600 語が物の名前, 名詞である。あるデータによれば名詞の比率は全体の語数の約 57% とか, それに比べてベーシックの 72% は多い。つまりベーシックは物の名前, 名詞主体の英語である。ただそのおかげで具体的であり, 実物や絵などで示せることばが多く習得しやすい。動詞も先に述べた通り動作などで示せるし, また方位詞は名前の通り空間内の方向, 位置を示す意味が root sense となっていて分かり易い。GDM での Sen-Sit という原理, 文とその状況とのつながりはベーシック自体がこのような特性を持っているからこそ可能になった。

8) 文脈の大切さ

専門用語などを除き語には固定した意味はない。人が使って初めて語の意味ははっきりする。ベーシックでは語数が少ないだけ, 脈略が大事になる。その語の前後の文脈だけでなく, 使われている場面, 使っている人の考え, 態度, 過去の歴史まで含めて。これは『意味の意味』の三角形で示されている。底辺の両端の symbol (語) と referent (指示物) とは直接に結びつかないので点線になっている。ことばは頂点の reference (それを使う人の考えや脈略など) を通してそれが指す事物と結びつく。脈略を考えずに語に決まった意味があるという間違いも「ことばの魔術」の一つで Ogden は厳しく非難している。日本の英語学習者は一般にそれぞれの語の意味から文の意味を解釈しがちだが, ベーシックはこの文脈の大切さを教えてくれる。

9) opposition

Opposition 「対」とは一般には余り意識されていないが, どんな世界でもこれか, あれかと対で考えることは不可欠である。対比という認識は言語の必須原理の一つで, ことばの世界でも対の概念は広く使われている, 動詞の自動詞と他動詞, 能動態と受動態, 名詞では単数と複数, 定と不定, countable と uncountable など。ベーシックでは語表の形容詞の欄には 50 語を opposites 反意語として別枠にしてある。また動詞も 16 の内 10 語が対 (go-come, get-give, put-take, keep-let, be-seem), 方位詞も半分は対 (from-to, before-after, on-off, up-down, under-over, in-out) になっている。

Ogden は語の意味をはっきりさせるのにこの対, 反意語という考えがきわめて有効と考え

た。学習上でも同意語はその差が微妙で外国人には区別しにくいが反意語ならはっきりしている。例えば、wrong と false の違いはピンとこなくても、right-wrong, true-false と対にすれば分かり易い。Ogden は *Opposition*¹⁰⁾ という本も書いて対について詳しく論じている。ただ反意語という語の組み合わせだけでなく、「対比」という意味で。Richards は Ogden の opposition の考えを高く評価してこれを英語教育に展開した。自分たちの目指している英語教育を ‘a planned serial ordering of opposition in sentences and situations’¹¹⁾ とした。ここには順序付け、対、Sen-Sit と GDM の key words すべてが表れている。GDM のテキスト *EP* でも最初の I-You の後 here-there, this-that と最初から空間の区別を対にしている。

10) fiction¹²⁾

fiction (虚構) とは belief, love, power のように現実には存在しない心の中のことばの上だけの作り物を指す。実体を指す dog や apple などの語と同じように使うので、fiction のことばでもつい何か対象物があるかのように考えがちである。fiction は実際の言語活動には不可欠だし、統語上の問題はないが、それに対する態度を考え直すことと Ogden は注意している。つまり対象物がないのに、まるで実体があるかのように考え、そこから混乱が起こることもあるので。ベーシックでは出来るだけ fiction のことばを分解してより事実に近い具体的なことばで言い換えている。*apprehension* は fear of the future, *liberty* は condition of being free など。2) で扱った一般動詞の削除も、それらは fiction の最たるものという Bentham の考えに Ogden が触発されたからだった。余りなじみのないことだが、fiction についても考えてみることは大切である。

11) metaphor

比喩は言語の働きの基本原理で、2つの物の類似を見抜く人間の想像力による。日常のことばの中に気づかれぬまま実際にはよく使われている。ドアの key が key to the question に、野原の field が field of science で科学の分野となるように。head of school, root of the trouble など名詞以外に、形容詞も dry talk, bitter experience, sharp pain, sweet girl など実際の感覚とは関係なく使われる。動詞も実際の動作から The war came to a stop. また put the key in the pocket から put one's heart in the work (熱心に働く), put the foolish idea into his mind (ばかげた考えを吹き込む) など。方位詞も比喩的な意味で広く使われている。in comfort / fear / love / motion / trouble, その他 against the war, off balance, on business, out of danger, get over the trouble, under control, give up hope など。

ことばの意味は比喩によって広がるのだから、語数の少ないベーシックではこれは大変有用である。Ogden は語を選択するのにこの比喩の働きに注目し、徹底した metaphor の目録を作ってそれを分析してベーシックに採用した。つまりベーシックには比喩に使われるような語が多くあり、これを上手に利用して意味を広げている。もちろん具体的な意味から比喩へ、英語教育では先ず root sense が定着してから比喩など広がった意味に入ることは当然である。

12) ことばの指示的用法と喚情的用法

『意味の意味』でことばのこの2つの用法の区別が論じられている。言語の働きの第一は指

示である。相手にはっきりと情報を伝えることが大事だから。このようにことばは主に外界の状況から真偽が確かめられるような論理的な働きをする，他方喚情的な働きもある。こちらは情動的な意味は余りないが，話し手の態度，聞き手に対する感情，指示物に対する態度などを表す。感情的なことばが指示的と信じられることはよくある。情報を伝えていると思っても何らかの感情で色付けされていることも多い。特にマスコミなどによる誇大広告，権威者側のことばにこのような注意は必要である。

ベーシックは事実をはっきり指示する認識の言語で，情緒性のあまり強いことばは出来るだけ避けるようになっていく。例えば *lust* は strong desire of sex, *sublime* は very beautiful などとすれば感情的含みは少し薄らぐと。 *fine*, *nice*, *wonderful* などは何にでも使え便利な語ではあるが，どれも「好い」という感覚だけではっきりした意味は伝えていない。情報を正しく伝えるのにはベーシックのような事実的なことばを使うことは重要だ。

13) 思考の道具として

日本語，他の外国語からでもベーシックに直すのには4) で述べたように1語から1語とはいかない。何が言われているか原文の意味内容をよく考えなければそれをくぐらしてベーシックで表すことはできない。この考えるという過程は確かに面倒ではあるが，私たちの思考の訓練には大変有効である。ベーシックはその機会を与えてくれる。

Ogden は大学のころからことばの思考に及ぼす力について考え，あいまいなことばによる思考の混乱を「ことばの魔術」と称して終生この問題に真剣に取り組んだ。『意味の意味』でもこの問題を取り上げ，健全なことばの使用のための方法を探求した。ベーシックはこれの解決法として考え出された。まさに「ことばの魔術」からの出口だった。極限まで切り詰めた語彙で一般的なことはほとんど何でも言えるベーシックという言語体系は理論的にはすばらしい。初期の英語教育にも活用できる。また上にあげたようなベーシックの特性は言語そのものを考えるのにも勉強になる。

ただし完ぺきなベーシックで英文を書くことは結構難しい。多くの人を使うには少しゆるやかなベーシック，その特性を生かした simple, clear な英語でもよいのではないだろうか。ことばは時代と共に生きているのでどうしても使いたいことばは出てくる，16 動詞はそのままして，名詞などは必要に応じて少し追加するなどの考えもある。

Ogden 自身は長年かけて練りに練ったベーシックについて絶対的自信を持って変更など考えずに，その普及に努めた。他方 Richards はベーシックのすばらしさに賛同し，すぐ習得して教育面への応用に努めた。ただ広く使えるようにとベーシックを広げて EME (Every Man's English) を提案した。動作名詞も動詞として使うとか， many, too, child, life, people, world など日常よく使う語を加えて。また net 上のベーシック組織は Need of Basic English for 21st Century という名目などでさまざまな企画が進んでいる。21 世紀の技術用語，国際インターネット用語などなど追加，補充の完成を現在も目指している。

注

- 1) Ogden は第一次大戦中ケンブリッジ大の雑誌にドイツやフランスなど多くの国からの報道記事を要約して載せた。イギリスの報道が偏っている中，これは高く評価された。多くの仲間と共に彼は忙

しい中もそれらの翻訳に精を出した。彼にとって翻訳は国際理解を高めるといふ大きな使命を持っていた。また California Univ. of Los Angeles の Ogden Archives には彼がヘブライ、カンボジア、韓国などマイナーな言語を 20 か国語ほど学んだ手帳が保存されている。

- 2) Richards (1976) *Complementarities: Uncollected Essays by I.A. Richards* (ed. by Russo et.al) Cambridge: Harvard U.P.
- 3) ベーシック完成までの試行錯誤は並大抵のものではなかった。きわめて粘り強い実験が続いた。語数の少なさ、学習の容易さ、簡素さ、規則性、範囲の広さ、明確さ、経済性、普通英語との合致などの要件のバランスをどうとるか考え抜いたと。また語数にしても増やしたり減らしたりまるでアコーディオンのように伸び縮みしたとのこと。Richards (1977) “Co-Author of the ‘Meaning of Meaning’” in P. Florence & Anderson (eds)
- 4) net 上のベーシック組織は Basic English Institute で検索すれば出てくる。http://www.basic-english.org//institute.html この Reading の項目にはベーシックの読み物など出ているので利用できる。
- 5) ‘delexical’とは「具体的な意味がうすれた」の意味で、give a laugh, have a rest など意味はほとんど名詞が担い、これらの動詞は delexical verb である（相沢『基本動詞の豊かな世界』参考）。
- 6) 他の印欧語との動詞制限の比較についてはベーシックの紀要 11（2003）に相沢の調査結果が載っている。同じ方針の Through Pictures シリーズで、英語 16 語に対しフランス、イタリア、スペイン語では 80~90 語使われている。動詞と方位詞への分解はそれらの言語ではほとんど不可能だから。
- 7) 16 語のような重要な動詞は文形成の働きが大きく、文の型を決め文法の役目を果たすと考えられる。これは Lexical Approach と言われている理論である（2018 の Year Book 相沢参照）。
- 8) 850 語について *The Basic Words* には各語に root sense から拡大、特殊用法が出ている。
- 9) Richards (1939) “Basic English and its Application” *Journal of the Royal Society of Arts* 1939
- 10) *Opposition: A Linguistic and Psychological Analysis* (1932) London: Kegan Paul
- 11) Richards (1968) *So Much Nearer: Essays towards a World English* New York: Harcourt. Brace & World
- 12) ことばの上の fiction については J. Bentham (1748-1832) が初めて論じ、theory of fiction を打ち立てた。それまで眠っていた彼の莫大な著作を 100 年後に Ogden が世に出し、彼はまた Bentham の考えから多くのことを学んだ。ベーシック考案も彼からの影響が大きかったと Ogden は Bentham のことを ‘true father of Basic English’ と称している。

スタート目前の小学校英語科～その言語材料と言語活動～

松 浦 克 己

はじめに

2020年度から始まる小学校の英語科は5年、6年でそれぞれ週2時間、3年と4年では必修として週1時間の外国語活動が行われる。外国語活動として70時間、教科として140時間、合わせて210時間が実施される。文部科学省が2018年5月、全国の公立小学校19,333校に実施した授業時数に関する調査では、2018年度に5、6年の高学年で29%の学校が70時間以上実施したと報告されている。2019年度はその割合が43%に上昇し、おおよそ半数の学校で先行実施される予定である。

5、6年で使用される教科書は今年の夏に公開、採択されるので、現時点ではまだ見ることはできないが、内容については新学習指導要領やその解説、そして文科省からのいろいろな資料で示されており、また学校現場では、3、4年用にLet's Try!そして5、6年用にはHi, Friends!とWe Can!という教科書に代わるものが用意され、ほとんどの学校で利用されている。

1. どんな英語を学ぶのか（言語材料）

5、6年での140時間の英語科の授業で、どんな英語を学ぶのかについては、Year Book No.70で、語彙と扱う英文の面から具体的に詳しく述べた。今回は新学習指導要領の解説書とWe Can!に関する資料から見ていく。

語彙に関して新学習指導要領の解説¹⁾で次のように述べている。「中学校の外国語科で学習する内容の基礎となり、かつ中学校に行ってからでも繰り返し学ぶことが期待される中心的語彙を想定しており、中学校の外国語科の学習の土台として十分な600～700語程度の語としている。(中略)なお、この600～700語というのは後述する発信語彙と受容語彙の両方を含めた語彙サイズであり、これらの全てを覚えて使いこなさなければならない、ということではない。…児童の発達の段階に応じて、聞いたり読んだりすることを通して意味が理解できるように指導すべき語彙(受容語彙)と、話したり書いたりして表現できるように指導すべき語彙(発信語彙)とがあることに留意することが必要である。(中略)このような語彙の質的な面と量的な面を考慮した上で、学習語彙をしっかり規定し、明確なイメージをもって指導計画を立てることが望まれる。」

中学の学習の「基礎」となり、その中でも特に重要な「中心的語彙」を扱い、そして「土台」となるべき語彙を扱わなければならない。まったくそのとおりであるが、We Can!では、his, her, theyは扱われていない。210時間勉強しても、誰かに自分の教科書と隣の生徒の教科書を区別して、This is my book. は言えても This is his book. は言えないという生徒を育てていることになる。学習者の立場から、これでほんとうに中学の学習の土台となっているか、はなはだ疑問である。検定教科書の全てでhis, her や they が扱われていないわけではないだろうから、英語の土台となる人称代名詞や指示代名詞をどう扱っているかを、教科書を選択するときの重要なポイントのひとつとしてもらいたい。

この600～700の語彙の中には自分の好み(例えば動物とかスポーツ)を言うときに、その

人だけが使うような語も含まれており、解説書でも述べられているように「全てを覚えて使いこなさなければならない。ということではない」のは当然であるが、逆に210時間も勉強したのに何も定着していないのは学習者にとって非常に不幸なことである。「学習語彙をしっかりと規定し、明確なイメージをもって指導計画を立てること」と述べているが、その語彙は示されていない。現場の判断に任されているわけだが、小学校の先生にそれを求めるのは現状では無理である。中学校の英語教師がリードしながら小学校の先生と一緒に、小中連携で考えていくことが必要である。これは教科としての前提条件である学年のつながりを現場に一任しており、非常に問題である。ただ、his や her の学習を英語の土台としない考え方に基づいた学習語彙（教科書）を鵜呑みにした授業より、学習者にとっては英語の基礎をつけるうえでより効果的な授業を受けるチャンスがあると考えられるという声が聞こえてきそうである。

新学習指導要領やその解説では「文法の用語や用法の指導を行うのではなく日本語と英語の語順の違い等の気づきを促すようにしたり…」といった表現で日本語と英語の根本的な世界観の違いに気づかせることを大切にしろと言っている。しかしどんな文を指導するかを説明している箇所²⁾では「代名詞のうち、I, you, he, she などの基本的なものを含むもの」と述べている。なぜここで it を省くのが分からない。I, you, he, she をひとくりにするのは日本語の考え方である。日本語は人と物で区別する。私は／あなたは／彼は／彼女はここにいます。私の本はここにありますというように「います」と「あります」を使い分ける。英語は話者とその相手以外の人、物は同じ扱いをする。He / She / It はおなじ is という動詞で受ける。また、He / She の複数も It の複数もおなじ They になる。というように世界の切り取り方が違っており、それを教えるのではなく気づかせたいと言っているのに、具体的な説明では日本語の考え方で英語に直していくと誤解されるような表現をしているのが問題である。その結果、中学校の教科書 New Horizon の1年のまとめのページで、三人称の説明の絵では4人の人間の絵とともに She（彼女） He（彼） They（彼ら・彼女ら）という英語と日本語が付け加えられているような説明がされる。そしてその約20ページあとの代名詞の一覧表では he と she と it が表の中のひとますと一緒に入れている。もちろん最初の絵のページにおいて it は既習語である。

小学校の英語科で扱う文は、①単文 ②肯定、否定の平叙文 ③肯定、否定の命令文 ④疑問文のうち、be 動詞で始まるものや助動詞 (can, do など) で始まるもの、疑問詞 (who, what, when, where, why, how) で始まるもの、と示されている。命令文では be 動詞の文も含まれており、例として Please be quiet, David. と Don't be noisy, Ken. が示されている。his, her や they が正しく使えるようになることよりも、be 動詞の命令文の方が中学の学習の土台として優先順位が高いと考えられている。ほんとうにそうだろうか。学習者にとってどちらが使えるようになって中学に入学するのが有効かをしっかりと判断して、まさしく学習指導要領の言うところの「明確なイメージを持って（そして的確な）指導計画を立てることが望まれる。」（ ）内は筆者。

代名詞を含んだ文を扱うときの注意として次のような記述³⁾がある。「なお、he や she などの人称代名詞を含む文を扱う際には、児童の発達の段階を考慮して、その場にはいない人を話題にするなどの場面設定をし、児童が he, she などの使い方を言語活動を通して分かるようにするとともに、文法の解説をしたり複雑な文になったりしないように留意することが必要であ

る。」ここで言われている発達段階を考慮する、言語活動を通して分かるようにする、文法の解説をしない、といった指摘はGDMの考え方の基本と同じであり、指導していくときに気をつけていくべき点である。ただ、その場にはいない人を言うときに he や she を使うという理解が小学5年や6年の児童に適切かどうかは非常に疑問である。この考え方をとるならば、隣の友達のことを Ken likes tennis. He plays tennis every Sunday. とは言わないで、ずっと Ken で言っていくことになる。このような使いかたをしていくかどうか教科書選定のひとつのポイントと言えるだろう。

2. 授業の様子（言語活動）

2010年代前半の小学校外国語活動の大きな柱だった「ゲーム」と「文字を使わない」は、今回の教科化で180度方向を変えた。望ましい方向転換なのでそれ自体はいいのだが、このような急激な変化は今やっていることも10年後にはまた…とってしまう現場の教師は多いのではないだろうか。

文字指導については、3年と4年の外国語活動で慣れ親しんできたということを前提に、5年と6年で「大文字、小文字を活字体で書くことができるようにする」という目標が定められている。今まで中学1年の4月、5月に一気に文字を書く指導がなされてきたことと比べると学習者にとってはとても好ましいことである。しかし、We Can! の中に直接文字に関する学習活動があるわけではないので、文字の導入や継続的な指導を十分に工夫していくことが必要である。

We Can! 1, 2でそれぞれ100を超える活動が用意されている。そのなかで今までのようなゲームは各学年で数個しかない。タイトルはゲームとなっても、内容はリスニングになっているものもあり、今までゲームばかりを文部科学省の方針に沿って一生懸命に指導してきた小学校の先生にとっては、戸惑いが大きいと思われる。

We Can! 1, 2でそれぞれ9つのUnitが用意されており、各Unitの初めにはLet's Watch and Thinkというタイトルの映像教材が準備されている。海外の風景や生活の様子などいろいろな動画が見られ、We Can! の新しい教材として注目されている。このLet's Watch and Thinkをはじめいろいろな活動がWe Can! には準備されている。同じ名前がついていても内容が大きく違う場合もあるが、活動名で数えると10種類になる。その活動数は5年では106個、6年では116個が準備されている。そのなかで上記のLet's Watch and ThinkとLet's ListenとLet's Playという3種類の活動で3分の2以上になり、その主な活動は聞く活動である。ゲームからリスニングに方向転換というのは、今回の教科化の特徴の1つである。リスニングといっても高校受験や英検のリスニングテストのように聞くだけでは小学生の学習としては成立しない。よって映像や写真などの視覚教材が必要となり、いろいろな形で準備されていると言われている。この点は望ましい流れであるが、視覚教材は情報がとても多いので、それがノイズにならないように指導者のコントロールが重要となってくる。このことに関してGDMの授業におけるライブのノウハウは非常に有効である。

3. GDM の活用

じゅうぶんとは言えないが、公表されていることから今後の小学校の英語科の授業について、言語材料と言語活動の面から概略を見てきた。中学校の英語の教科書は文法シラバスを中心に作られており、話題シラバスで作られている小学校の教科書とは、他教科のようにきちんと接続していないのは当然であり、内容的に中学校の学習の前倒しはしないと文科省は説明、そして正当化しているが、学習者の側から見ればそのようなことは関係のないことで、小中で5年間英語を学んでどのような英語の学力が身についたかが問題である。

とにもかくにも英語学習の入門として2019年度は小学校5、6年で約半数の学校で年間70時間、残りは50時間の英語学習が行われる。そして来年度はすべての小学校で70時間実施される。そのなかで扱われる約700語の語彙について、どう扱っていけばいいか考えていくときに、GDMの基本的な考え方はとても参考になる。GDMの考え方をもとに扱う語彙を取捨選択したり、指導の軽重をつけたりしていくことが必要である。このようなことを配慮せず、ただ単に教科書を順番に教えていくだけでは英語嫌いを増やすだけ、そして中1ギャップをさらに大きくするだけの教科化になってしまうであろう。

文科省の中学校担当の教科調査官⁴⁾は次のように述べている。「小学生の多くは帰納的に外国語を学んでいるということです。(中略)中学校では教えるべき言語材料が多様多様ですから、学習効率という観点から演繹的な指導も必要です。しかし、3年間を通じて常に演繹的な指導を行っている場合は見直す必要があります。」GDMの大きな特徴のひとつに、日本語はもちろんのこと英語による説明をしないということがあげられる。生徒はSENSITやコントラストからその単語や文の意味や使い方を試行錯誤しながら、まさしく帰納法的に見出していく。そして精緻に考え抜かれたグレードにより、小学校英語の教科書とは比べものにならないほど効率よく、学習指導要領の言うところの文構造をしっかりと身につけていくことができる。

GDMの活用法のひとつとして条件が整うのであれば、次のようなことが考えられる。GDMの1時間目、I / You / He / She / It / They から EP Book 1 の12ページ in / on までは、存在を表す be 動詞、場所を表す here / there、指示代名詞、人称代名詞の所有格 my / your / his / her と冠詞 a / the、そして前置詞 in / on を学習する。これらは英語のもっとも大切な基礎であり、GDMではこれらを無理なく、そして意欲的に自ら学習していくことができる。これらは言語材料のところで述べたように小学校英語ではあまり重要視されず、また中学校でもきちんと系統立てて学習できる教科書は見あたらない。6年生の後半にGDMの授業を実施して、in / on まで学習して be 動詞の基本や前置詞のワードオーダーをきちんと定着させ中学校の学習に入ることができれば中1ギャップも少なくなり、中学校の教科書の弱点の1つである人称代名詞や be 動詞の定着に関して、とても有効な方法になる。

We Can! はとても盛りだくさんの内容であり、これを基本にして作られる教科書もそれぞれ多少の違いはあるものの70時間で終わるのは厳しい内容になると予想される。このような状況のなかで、GDMのin / on までの授業を入れ込むのは、授業時間数的に無理と考えるのが普通である。しかし小学校の英語教科書は文法シラバスでは作られておらず、中学校の教科書との文法的な接続はきちんとはなされていない。ということは、小学校の内容を終えていなくても中学校の学習に大きな影響はないということになる。文科省は定着までは求めないと言っているのだから、10数時間分をGDMの授業に回し、上述の内容をGDMできちんと定着さ

せた方がはるかに学習者はスムーズに中学校の学習内容に入ることができると言える。内容的に接続していないことをうまく活用すればいいのである。

2019年度までの数年間は全国の99%以上の小学校の外国語活動で、Hi, Friends! か We Can! が使われているという状況になっており、これら2つの教材は授業では実質的に教科書であり、日本じゅうで1種類の教科書だけで英語教育が行われているということになる。たとえその教科書がどれだけ優れていたとしても、日本全国でその教科書しか使われていないというのは、おかしなことであり、そして恐ろしいことにつながる可能性もある。しかしこの異常な状況について言及されることは、今までほとんどない。少なくとも筆者は見たことがない。この点からは残念ながら来年度から始まる小学校の英語科は、このような今までの異常な状況を土台としたスタートであると言わざるを得ない。それでも現場の教師の献身的な努力で英語嫌いが増えないことを願うばかりである。

注

- 1) 小学校学習指導要領解説 外国語編 (2017) P 30
- 2) 小学校学習指導要領解説 外国語編 (2017) P 34
- 3) 小学校学習指導要領解説 外国語編 (2017) P 35
- 4) 文部科学省教科調査官 (中学校) 山田誠志 英語教育 (大修館書店) 2018年12月 PP 10-13

The Basic English Reading Books より ‘A DOG FIGHT’

L. W. ロックハートの Basic English 運用術

松川和子

はじめに

English Through Pictures Book 1 and Book 2 (EP B 1, B 2) および *A Second Workbook of English*¹⁾を終えた成人クラスの教材として、前に担当したクラスでは EP や Basic English (BE) から離れ、一般的な短編集を取り上げた。しかし、今回はこれまでの学習を基礎に既習語を十分に活用しながら、content wordsを増やし、また paragraph reading に慣れていけるような BE の教材を探していた時、Basic English Workshop で *The Basic English Reading Books*²⁾の stories を学習者の立場で体験する機会が何度もあった。いずれのデモもそれぞれの物語の面白さが十分に表現され、引き込まれる内容だったので、これを指導教材に決めた。取り組み始めて約3年の間に Book 1 (Milking, New Shoes, A Day of Troubles), Book 2 (Road Up, Tree-Top House, A Strange Fish, Sailing on the Ice, A Dog Fight) などの8話を学習した。これまでの学習を通じて、魅力ある BE の世界を垣間見ることができた。“A Dog Fight” は2匹の犬のけんかを描いている作品である。L. W. ロックハートが BE の働きの大きい、英語の核となる語句を存分に活躍させ、スピーディーで臨場感のある話に仕上げている。どのようにこの話が「書かれて」いるのか。まずは(1)語いについて、特に「基本動詞」(相沢1999)³⁾がどのような役割を担い、どのように他の語に結びついて物語を作り上げているかを探りたい。動詞でありながら、Operations に分類されている「基本動詞」について相沢(2013)⁴⁾は「他の語を操作して文を形作り、一般の動詞とは全く異なる。頻度も非常に高く、文法的働きが大きく、数も限られていることなどから前置詞などの機能語に類似していて、Operations の群に入っている。」(pp.66-67)と述べている。また、BE の ‘Rules’⁵⁾に基づく接頭語、接尾辞の例も紹介したい。(2)では、著者が142語の Basic Words を駆使し、いかに読者の想像力を刺激し、省エネ使用で最大効果をあげているかを分析する。

(1) 語い

1. 既習語・新出語の比率と分類

この話には B E Words 142語が登場し、その約80%は EP B 1・B 2の既習語(「基本動詞」としては come-go, give-get, put-take, make, be, do, have の10語)である。固有名詞を除き、学習者が初めて出会う語は29語: police (international word), so, quite (operations 2語), quiet, stiff, angry, conscious, complete, sharp, serious (qualities 7語), fight, chain, care, run, throat, danger, attention, grip, jump, roll, dust, attack, surprise, bite, help, blood, damage, wound, trouble (things 18語)。総語数は固有名詞を除き、311語である。

2. 文中の「基本動詞」+α

「基本動詞」+名詞

take a great care, take a grip, give no attention, give a cry, give a jump, have a bite,

- get the worst of
 「基本動詞」+ 方位語
 take~for, put~down, go out, go across, go through, go for, go on, go in, come round,
 get~away
 「基本動詞」+ 前置詞句
 keep~on a chain, get to one's feet, get into trouble, be in the wrong, take~for a run
 「基本動詞」+ 形容詞
 keep quiet

3. rules⁵を用いた接頭語, 接尾辞の例

- a) -er: fighter (fight + er), attacker (attack + er)
- b) -ed: covered (cover + ed), pleased (please + ed)
- c) -ing: rolling (roll + ing), biting (bite + ing), pulling (pull + ing), running (run + ing)
- d) un-: unconscious (un + conscious)

(2) 語いの選択と文章構成を分析

1. 緊張感を生み出す工夫。

最初のパラグラフ 'Harry's dog Caesar was a great fighter. So Harry had to take great care when he went out with him and keep him on a chain.' a great fighter と take great care と great を繰り返しているところや keep him on a chain の描写から Caesar がいかに危険か、冒頭から何か騒動になるのでは? との空気を感じさせる。そして、2 番目のパラグラフには、'Mac was a quiet little dog, not at all Caesar.' と 2 匹目の犬が登場し、not at all の 3 語で、Mac が身体も性格も Caesar と正反対であることを示している。読者は 2 つのパラグラフを読んだだけで、「身体の大きな気性の激しい犬」が「穏やかな小さな犬」に何かいやなことをしかけそうだと推測し、話の展開に期待する。

a great fighter の great と take great care の great はそれぞれが修飾している名詞の違いで意味合いが異なる。great を辞書で調べると、great talker の例があり、'used to emphasize that someone does something a lot.' とある。著者は Basic English rule の名詞 + er を用いて、a great fighter と表現する。この意味は「しばしば喧嘩をする犬」であり、もう一方の great は 'very large in amount or degree' の意味で「十分な注意が必要」の意味である。同じ語を使ってもあとに続く名詞により、その意味の違いは十分に表現されている。

2. 戦いの予感

視覚や聴覚に訴える Caesar の変化。読者は Harry のすぐ隣にいるような気持ちになる。'The hair down Caesar's back became stiff when he saw Mac, and his tail went straight up in the air.' ここでは down が良い働きをしている。背中中の毛が「ずっと尾まで」逆立つ。そして尾もまっすぐ。'At the same time he made low, angry noises in his throat.' そして、うなり声も聞こえる。'But Mac seemed quite unconscious of his danger.' それに気づかぬ Mac. not を使わず、un- + conscious ですっきりとした印象。'Caesar gave no attention. きっぱりと言い

切っているのです、Caesar がすでに戦いモードに入っていることが読める。短い力強い表現。Harry put his hand down to take a grip of the dog's collar, but was not quite quick enough. 読者は Harry の手が下りてきて、首輪を握ろうとする様子を目で追う。not quite quick enough でもはや手遅れ！ と戦いの予感。緊迫感が高まる。

3. 戦いの様子

どこにどのように飛びかかったか。'gave a jump straight at Mac's throat.' 相手の喉をめがけた攻撃と分かる。give a jump で飛び上がって一撃を加える様子、at を用いることで喉に集中して攻撃していることが分かりやすい。転がる Mac。反撃に向かう Mac。'But he got to his feet again with a shake, and went for his attacker.' got to his feet はいわゆる 'stand up' という意味だが get to の辞書の意味である 'physically reach something' から言うと、Mac の身体がしっかりと足に乗り、すくっと立った様子を感じることができる。これが stand up で書かれていては Mac の敵に立ち向かう勇敢さは表現できていないと思う。attack + er で Caesar の名前を繰り返さず緊迫感を持続。すぐにも勝てると Mac を見下していた Caesar の驚く様子が 'It was a complete surprise for Caesar.' と表現されていて面白い。dogs ではなく、animals を用いることで、本能をむき出しにした戦いだと分かる。2匹が転がる音、身体がぶつかる音、白い歯を見せて噛み合う二匹の凄まじい戦いはこれ以上削れないシンプルな文章での確に描写される。'The two animals went rolling over and over, biting at first an ear, then a leg, with their sharp, white teeth.' roll + ing, bite + ing で「転がっている」二匹、「噛み合っている」二匹が示され、'sharp' 'white' の二語で噛まれるとさぞ痛いだろうと想像を促す。

4. 警官の仲裁

He went in between the two dogs, and at last got them away from one another. これは英語の分析的表現がとても生きている場面。go in between で警官が二匹の間に割って入る様子。get them away, from one another で暴れる犬を手で「なんとか」「別々に引き離す」様子。EP の SEN-SITs で学んでくるとこういった場面はすぐにイメージができる。

5. 負け犬の気持ち

小さな犬に襲いかかり、身体的にも精神的にも Caesar がいかに「痛い」目にあったか、その後の様子も含めて、long time を使い、短い文章だが心に残る一文。'It was a long time before he got into trouble again.' get into trouble で Caesar がまた自分を面倒事に引き込む感じが get into に出ている。

6. 勇敢にそしておごらず

最後の文章、'Susan was pleased that Mac had done so well because Caesar had been in the wrong, but she didn't say so to Harry.' を読み、著者は「卑怯な相手には勇敢に立ち向かいなさい。負けた方が十分にその痛みを分かっているようならあえて相手の非を責めるようなことはしないでください。」といているのではないかと。勇敢に戦った Mac の飼い主である Susan の誇らしい気持ちや卑怯な相手を許す寛大な気持ちが見事に表現されている。

おわりに

読む力はまず単語力と良く言われたものだ。しかし、*The Basic English Reading Books* の物語は 1,000 語も学べば十分に楽しむことができる。それは相沢 (2013) が語るように「ベーシックでは、名詞はできるだけ目に見え、絵で示せるような具体的実物を、動詞は実際に身体を動かして示せるような基本的な動作を基にしている。そのような root sense からもっと抽象的、複雑な意味にもスムーズに展開できるようになっている。」(p.24) からで、本稿の (1) では、この物語の「基本動詞」がどのような語と結び合っ文を形づくっているかを観察した。授業で新出語の名詞や形容詞の意味を SEN-SITs で理解すれば、後は 10 の「基本動詞」がそれらを「移動」させたり、「やり取り」したり、「作り出したり」することで、物語のおよその姿が浮かび上がってくるのである。このように BE で書かれた読み物をいくつも読み、どのような語をどのように有効に使うかを知り、暗唱することで自然と BE の運用力が養われると思う。ただ、BE で書かれた読み物が面白くなければどうであろうか？

(2) では 'A Dog Fight' の語いの選択や文章構成を観察した。著者は多くを語らず、ただ、読者に場面が「見えるように」「聞こえるように」工夫している。そうして、読者の想像力をかき立て、物語の世界に引き込む。だから、読み終えたときに、読者は自分も主人公たちと一緒に行動したような気持ちになり、「楽しかったり、怖かったり、愉快だったり」するのである。

これは他の 7 作品にも共通する。“Road Up” という作品では男の子が道路工事で大好きなロードローラーに乗せてもらい喜ぶが、工事が終わって車も人もいなくなる。そして最後の文章は、'When the road was done and the men went off with the steam-roller and all their machines, it seemed to Michael as if he was parting from old friends.' 読者は男の子と一緒に工事現場におり、ロードローラーに乗っていたのである。だから読者は 'parting old friends' を自分のことのように「淋しく」感じるのである。*The Basic English Reading Books* をいくつも読み続けてこられたのは、BE 850 語の簡潔性と有用性と L. W. ロックハートの的を得た表現のお蔭であった。big words をふんだんに使って「語りすぎる」ことの愚かさもこれらの作品は教えてくれるのである。

注

- 1) English Through Pictures Book 2 巻末 p.165-296
- 2) L. W. ロックハート著 Book 1~3, Basic English で書かれた読み物。GDM 英語教授法研究会翻刻
- 3) 相沢佳子. 1999. 『英語基本動詞の豊かな世界 — 名詞との結合にみる意味の拡大』 p.6 に「基本動詞」として come-go, give-get, put-take, make, be, do, have をあげている。
- 4) 相沢佳子. 2013 『英語を 850 語で使えるようにしよう~ベーシック・イングリッシュを活用して~』
- 5) Basic English List に Rules の項目があり Forms ending in 'er' 'ing' 'ed' from 300 names of things とある。また、un-については *The Basic Words* (C. K. Ogden 1983) の note に、Un- may, for example, go before any word which has taken the -ed ending and before a number of words which have taken the -ing ending. の記述がある。

資料 Text

'A Dog Fight'

Harry's dog Caesar was a great fighter. So Harry had to take great care when he went out with him and keep him on a chain.

One morning when Harry was taking Caesar for a run, he saw his friend Susan on the other side of the street with her dog Mac. Mac was a quiet little dog, not at all like Caesar.

Harry went across the street to say good-morning to Susan. And Mac came round to say good-morning to Caesar.

The hair down Caesar's back became stiff when he saw Mac, and his tail went straight up in the air. At the same time he made low, angry noises in his throat. But Mac seemed quite unconscious of his danger.

"Keep quiet! Good dog!" said Harry. Caesar gave no attention.

Harry put his hand down to take a grip of the dog's collar, but was not quite quick enough. Caesar gave a jump straight at Mac's throat and the chain went through Harry's fingers.

Mac went rolling over in the dust. But he got to his feet again with a shake, and went for his attacker. It was a complete surprise for Caesar. The two animals went rolling over and over, biting at first an ear, then a leg, with their sharp, white teeth.

Susan gave a cry for help. Harry took Caesar by the tail, pulling as hard as he was able. It was no use. The fight went on.

Then a policeman came running up. He went in between the two dogs, and at last got them away from one another.

One of Mac's ears was covered with blood, but the damage was not serious.

Caesar had got the worst of it. He had a bite over his right eye which gave him great pain, and there was a wound in his neck. It was a long time before he got into trouble again.

Susan was pleased that Mac had done so well because Caesar had been in the wrong, but she didn't say so to Harry.

Básic English と自修本としての 'English through Pictures'

後藤 寛

まえがき

本稿でのテーマは大きい。論旨をさらに展開するには紙面の余裕がなく、詳細には扱えない。したがって第1節では焦点をほぼ1点に絞ってみることとなる。そして第2節では他のポイントをも若干意識したものと異なるが、概して示唆的に提示するのみの形となる。

1. 事象的「変化と変化の結果」という考え方

Richards, I. A. and Gibson, M. C. 著の *English through Pictures* (Bks I, II & III) (以下, EP と表記) はそもそもその背景に何を示唆しようとしているものか? であるが, 事象的には**移動事象 (motion event)** の考え方が1つあると言える。これは図形的には「点」を「線」にする見方でもある。移動事象には source (起点) → path (経路) → goal (着点) という推移 (transition) がともなう。これは別な言い方をすれば「**変化**」とその「**変化の結果**」という考え方にもなる。こういう事象分析 (event analysis) は言語に内在する原理を追究することになる。

われわれが外界の状態を認識するいわゆる五感 (the five senses) 以外の, もう1つの感覚としての**第六感 (the sixth sense) となる運動知覚 (sense of motion)** ということにもなるが (EP II, p.129 参照), このあたりは言語的には動詞 V の aspect (相) としての ingressive (起動相), durative (継続相), perfective (完了相) の3つが関わっている。

端的な例を挙げれば, たとえば go up / go down / go round / go away などにおける動詞 V の意味を最終決定するのは go そのものではなく, 後ろの下線で示したそれぞれ **particle (空間不変化詞 P)** である。go には「移動」の意味しかない。V の意味は P と目的語 O が決定するということである。これは V の aspect と関わっていて, たとえば EP I (p.59) の文例 He is giving a push to the door., また EP II (p.38) の文例 You gave a push to the table. はドアやテーブルの動き・移動までは必ずしも含意しない。これらはそれぞれ対格構文の He gave the door a push., You gave the table a push. なら移動が実際に起こった意味となる。好例として EP II (p.145) に She is crying. Why? Because she gave her knee a blow in her fall. がある [このあたりの事情はすでに数年前にも本会の *Year Book* で扱った]。関連し, 次の文例をしてみる。

① They put up the shutters.

② The plane will come to a complete stop. cf. ?The plane will come to a sudden stop.

③ The plane made a sudden stop. / The plane stopped suddenly.

このうち①, ②では破線の V の意味は下線の P が最終決定する。移動事象的にそれぞれの文での特に「経路」を意識下におき, 「変化」とその「変化の結果」として理解されるとよい。①のシャッターの場合は「閉めた」であり, 「開けた」ではない (cf. EP II, Workbook, p.281 の He went over to the window, and put it down very hard, ...)。②に関連し, 国際線の飛行機で着陸前の機内アナウンスで Please remain seated until the plane comes to a complete stop. をよく耳にする。remain と until は Basic 語ではないので, Basic なら Please keep seated till the

plane comes to a complete stop. でよいわけであるが、いずれにせよ、こういう場合の the plane comes to a complete stop は the plane stops completely というより自然に筆者には思える。移動事象的に飛行機が着陸し滑走路を走り、徐々にスピードが落ち、最終的に停止状態となるその距離的経路、また時間的経過が推移として感じられるからである。plane でも train でも、②の will come to a complete stop は自然であるが、cf の will come to a sudden stop は間違いではないが、実際にはやや微妙か？V が完了アスペクトで P の埋没する③なら問題はない。

移動事象的に他動詞 Vt は lexeme (語彙素) 〈DO〉, 自動詞 Vi のそれは 〈BECOME〉として示されよう。このあたりの事情は、ラテン系ロマンス言語スペイン語で他動詞 Vt を自動詞 Vi 化する語尾の -se 形があることに注目するとよかろう。-se 形は再帰動詞的な働きとなる。スペイン語で、たとえば「行きつづけ、行ってしまう」の irse (= go away) は自動詞 Vi に付加される -se であるが、「燃えつづけ、燃え尽きる」の quemarse (= to burn away), 「飲みつづけ、飲み尽くす」の beberse (= to drink away) などは他動詞 Vt に -se の付加で Vi となる。これは「ゼロ (0) にする → ゼロ (0) になる」(to become zero) の意味と解される。

図形的な点と線、移動事象の起点・経路・着点、変化と変化の結果としての状態という見方から文の構築法を示唆的に説いているが、たとえば次の文 (Basic 文) の読み聴きで意味を理解するためには、モノの移動状態が瞬間に図形的にイメージ化される必要がある。

- a) In the dark John was feeling his way from tree to tree to a stretch of water.
- b) The plane was coming down the runway to take off.
- c) The plane was coming down to the runway to make a landing.
- d) The bee is going up and down round the flowers.
- e) The Ferris wheel will come back round in ten minutes.
- f) The pain came up slowly, from the back of the knee right up to the lower back.
- g) A group of ants went all the way back up in between the crack of the stem of the tree.

この類の文が難なく使えるようになる必要があるがどうしてもある。そうでない限り決して英語は真には身につかない。ネイティブの英語は空間遠近法的な言語描写例が次々と頻出するが、英語力を推し量る確実な指標となるこの類の空間描写 (spatial representation) が、発話でスラスラできる日本生まれの、日本育ちの、日本人は事実上皆無である。

a) は水平的に点と点を結びつけ直線にする思考である。暗闇でジョンが手探りで経路としての木から木をつたい、最終的な着点が小川 (池) であったわけである。文中に way の入るいわゆる「way 構文」である。b) と c) はまったく意味が異なる。b) は飛行機が離陸 (taking off) するために滑走路に接触した状態で移動していたのであり、c) は飛行機が着陸 (landing) するために滑走路へ向けて下りてきていたのである。d) は花の周りでのミツバチの上下運動とともに曲線を描く移動、e) は観覧車がやはり曲線を描きながら戻る移動である。移動の変化状態が back で指定される例である。f) は a) と似ているが、上下の垂直的な描写で起点から経路を経て着点に至る移動。g) も way 構文であるとともに、空間不変化詞 (spatial particle) が3重の織り込みとなる構造で、アリが下方から再び最上部の狭い空間内に入った状況である。

a)~g) は状況的にすべて空間上の起点 (source) から、経路 (path) を経て、結果としての

着点 (goal) への変化 (be の状態) である。基本となる lexemes は FROM → THROUGH → TO と言える。

関連して、たとえば広大で空間社会とも言える新大陸アメリカで 'from coast to coast' (海岸から海岸まで) という言い方がある。最初の coast (un-Basic 語であるが) は東海岸のことで、後ろの coast は西海岸のことである。これは歴史的に東から西への西部開拓という空間上の見方から来ている。チェーン店などが全米にあることを示すときなどにもこの言い方をする。一方でこれは 'from Maine to California' (メイン州からカリフォルニア州まで) とも言う。最東岸の Maine から最西岸の California のことである。さらに関連し、アメリカ内では西部を 'out west', 東部を 'back east' と言うが、これも同じ歴史的な空間の見方である。なお、オーストラリアやニュージーランドのことを英語で 'Down Under' と常識的に言う。東西南北 (英語では north, south, east and west の順) の方位での南ということである。

EP I・II では空間での状況、すなわちモノの移動と変化状態とともに空間不変化詞 (spatial particle) の提示順序に再考されてよい部分のあることを感じる。頁を飛んで提示もされるが、一括的に見たほうが事の本質により迫れる。spatial particle は単層空間不変化詞 (single spatial particle) ばかりでなく、重層空間不変化詞 (multiple spatial particle) にもっと焦点があてられるとよい。後者を含む文をここでは特別に **Multiple Spatial Constructions** [重層空間構文 (MSC)], それに準ずるものを **Pseudo-Multiple Spatial Constructions** [擬似重層空間構文 (PMSC)] と呼んでおこう。この英語に特徴的な構文はもちろん EP でそれなりに提示はされている。しかし、やはり一括性を欠くと同時に例も少ない。

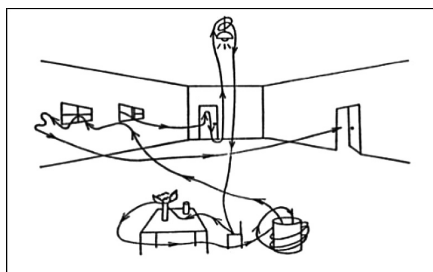
以下に EP I・II (III は除外する) で提示される MSC / PMSC 構文をすべて列挙してみることにする。

- 1) He will go out of the room through the door. (EP I, p.63)
- 2) It (= The air) goes up to the flame. (EP I, p.96)
- 3) Air which we take in and give out through our noses and mouths is our breath. (EP I, Workbook, p.185)
- 4) The plane is over 10,000 feet up in the air. (EP I, Workbook, p.186)
- 5) I will make a hole through this part of the roof into the other part of the roof. (EP II, p.40)
- 6) Snow comes down from the sky. (EP II, p.56)
- 7) In the fall the leaves come down off the trees. (EP II, p.70)
- 8) It (= the size of the sun) is 864,000 miles through from one side to the other. (EP II, p.75)
- 9) The light goes out from the sun in every direction. (EP II, p.77)
- 10) They all came down to the earth. (EP II, p.79)
- 11) ... it (= the square) gets all the light which is going out between the lines. (EP II, p.82)
- 12) The weight is hanging down on the cord which is in my hand. (EP II, p.84)
- 13) The moon goes round and round the earth ... month after month. (EP II, p.85)
- 14) The rain comes down from the clouds on us. (EP II, p.94)
- 15) They (= The threads) go across from one side to the other of a frame. (EP II, p.99)
- 16) They (= Other threads) go under and over them (= the first threads). (EP II, p.100)
- 17) Plants come up from seeds which come from other plants of the same sort. (EP II, p.101)

- 18) It (= The light) is bent again where it comes out of the glass into the air. (EP II, p.105)
- 19) My second finger is over and across my first finger. (EP II, p.113)
- 20) They (= Some mines) go far down into the earth. (EP II, p.122)
- 21) He is shaking it (= the other end of the cord not fixed to a tree) up and down. (EP II, p.134)
- 22) With every shake he sends a wave down the cord to the tree. (EP II, p.134)
- 23) He does not let his thoughts go off to other things. (EP II, p.153)
- 24) ... the wind took Mrs. Grant's hat off her head and up into the air. (EP II, Workbook, p.172)
- 25) He went out of the house and down the front steps to the street. (EP II, Workbook, p.191)
- 26) From the windows of the newspaper office, which is high up in a downtown building, one sees the water on a clear day. (EP II, Workbook, p.198)
- 27) The city has a great harbor with ships coming in from everywhere. (EP II, Workbook, p.198)
- 28) He will send the story over to the *editor before morning. (EP II, Workbook, p.200)
(*editor: un-Basic 語)
- 29) The earth goes round from east to west. (EP II, Workbook, p.207)
- 30) Will William go up high in the tree? (EP II, Workbook, p.213)
- 31) ... it is his brother Jack down on his hands and knees. (EP II, Workbook, p.213)
- 32) Men, women, boys and girls are out in the sun. (EP II, Workbook, p.223)
- 33) ... steamships were going over the sea from America to Europe. (EP II, Workbook, p.233)
- 34) Wind takes seeds from plants up into the air. (EP II, Workbook, p.246)
- 35) The apples coming down off the branch are in motion. (EP II, Workbook, p.247)
- 36) ... now the young plants are coming up out of the earth. (EP II, Workbook, p.273)

これで EP I・II に現れる MSC / PMSC は事実上すべてである。移動事象における変化の推移としての特に経路 (path) [lexeme の THROUGH] に注目すべきで、遠近法とも関わる空間思考法に習熟しない限り日常会話は決しておぼつかない。後藤 (1997, pp.88-92) で、基本が手早く身につけられる状況例を視覚的に図解し一括提示している。ここでは図 (p.90) のみを下に転載しておく。こういう状況が英語でスラスラ言えることがまずは基本となるはずである。

cf.



後藤 (1997, p.90) より

2. 'English through Pictures' (EP: Bks I & II) における Basic 語とその提示順序

ここでまずは以下に 'English through Pictures' (I・II) で提示される Basic 語とその提示順序 ('I' で始まり 'play' で終わるが) を一覧表 (早見表) にして掲げてみる。

EP (I・II) における Basic 語 [本体 850 語中の 495 語 (+α)] 提示順一覧 (早見表)

頁	(提示語)	頁	(提示語)	頁	(提示語)	頁	(提示語)
1	I > we, my, me, our, us, -self	19	give		question		mouth
			to		answer		say
	you > your	22	ship		mark	43	between
2	he > she, it, they cf. his, her, him, its, them, their cf. 's 18		bottle		after		cover
			water		yes	44	under
		23	glass		no		over
4	be > am, is, are		and		not		light
	here		floor	31	page		dog
	there	24	bird	35	clock	45	hair
8	this cf. these 10	25	arm		time		short
	a cf. an 25		leg	36	number		long
	man		foot		from		ear
	woman		seat	37	thing		face
	that cf. those 10	26	room		boy		part
10	table		window		girl	46	before
	hat		door		person	47	then
	hand		picture		with	48	(which) < who 58
	the		of	38	where	49	body
	thumb		shut		together		all
	finger		open		book		baby
11	head	27	wall		shelf		tail
	in		cord		but		or
	on		hook	39	again	50	toe
13	right		frame	40	eye		knee
	left	28	house		other		neck
14	will		street	41	see		chin
	take	29	go		do > does, did	51	chest
	off		at	42	have > has		drawer
18	now	30	(what) < who 58		nose	54	wood

頁	(提示語)	頁	(提示語)	頁	(提示語)	頁	(提示語)
58	who	84	box	95	air		sort
	name		front		plane	107	goat
	pocket		back		breath		same
	key		side	96	very	108	son
59	put		coat		egg		mother
	lock	86	tray		keep		daughter
	turn	91	make	97	instrument		father
	push		milk		for	109	brother
60	come		potato		measure		sister
63	out		cow	98	thick		family
	through		animal		thin	110	clear
65	when		some		line		mountain
71	get		pig		good	112	bone
73	money		sheep		drink	↑ 以上 EP I ↓ 以下 EP II	
75	wind		horse		happy		
	up		cup		bad		
76	down	92	skin	99	meat	2	bed
77	knife		root		bread		by
	fork		plant		cheese		bag
	spoon		earth		butter	3	train
78	soup		flower	100	orange		journey
	plate		leaf	101	hard	4	shirt
80	dress		fruit		soft		sock
	new		stem	102	crush		hole
	old	93	pot	103	bit		trousers
	pipe		boiling		tooth	5	clean
81	stone		steam	104	salt		dirty
	shoe		flame		low		cloth
	stocking	94	heat		high	7	basin
	glove		ice		building		soap
82	tree		solid	105	taste		wash
	branch		liquid		ready		wet
	apple		cold	106	food	8	dry
	basket		warm		different		brush

頁	(提示語)	頁	(提示語)	頁	(提示語)	頁	(提示語)
	paste		step		wide		quick
9	white	18	morning	35	cut	60	stick
	comb		reading		angle		young
10	pin		education	37	blade	62	as
	like		great		pencil		equal
12	station		school	39	straight	63	may
	<i>taxi</i>		teaching		bent		transport
13	waiting		learning		attempt		<i>automobile</i>
	engine		board	40	nail		carriage
	bell	19	story	41	hammer		place
	rail		look		strong	64	near
	road		work	42	broken		far
	ticket		love	43	support	65	map
	office	22	round		middle		river
14	day		moon		end		island
	how		sun	45	collar	66	government
	much		cloud	46	button		about
	week		sky	47	needle		sea
	little	23	east		thread	67	land
15	friend		west	50	scissors		ever
	let		every		narrow		why
	please		night	55	because	68	dark
16	letter	24	yesterday		year		bright
	word		today		month	69	full
	writing		tomorrow	56	winter		change
	paper		star		summer	71	price
	pen		north		spring	75	ball
	send		south		fall		small
	<i>post</i>		direction		snow		fire
	stamp		hour	57	than		size
	town	31	opposite		minute	77	second
	living	34	roof	58	distance	79	first
17	card		enough	59	walk		last
	harbor		wood		slow		black

頁	(提示語)	頁	(提示語)	頁	(提示語)	頁	(提示語)
80	attraction		cart		able		whistle
	weight		skirt	117	hearing		music
	fat		across		talk		song
81	scale	100	roll	121	sense		note
	watch		wool		tongue		church
82	if		cotton		lip	134	sound
	square		silk		powder		fixed
84	hanging	101	twist		sugar		shake
85	pull		seed	122	mine		wave
86	science		worm		deep	135	brain
	mind	103	seem	123	sweet		bucket
87	true	104	ray		cake		monkey
	false	106	point		top	138	pleasure
	statement	108	spade		bitter		beautiful
	cause		boot	124	smell		pain
	idea	109	paint		grass	142	smile
	blow		addition		garden		laugh
	motion		<i>bank</i>	125	color	143	certain
88	rest		<i>check</i>		green	145	cry
	effect	110	important		red	146	sand
93	umbrella		business		blue		swim
	rain		account		yellow	147	rough
94	weather		farm		gray		smooth
96	only	111	plow	126	tall		desire
97	amount		field	127	kettle	148	cat
	drop	113	touch	129	rate		wrong
98	discovery	114	strange	131	stop	149	way
99	smoke		feeling	132	noise	152	sleep
	use	115	chief		loud	153	thought
	wheel		knowledge	133	gun		play

〔備考〕

- 頁番号は、EP (*English through Pictures*) by Richards, I. A. and Gibson, C., Washington Square Press 版 (第45版, 1968) [初版は1945] 以外の版による EP I・II での表示。
- Basic での一般的な提示法に準じ、接辞 (-ing, -ed, -er, un-, etc.) 付きの語・合成語・度量語などは除外。
- what と which の2語は who からの派生とする Basic での考え方により括弧付けで表示。
- Basic 国際語彙 (ここでは *automobile, bank, check, post, taxi* の5語) は、イタリック体による表示。

一見、何の変哲もないように思える上の一覧表は、EP I・IIで提示される Basic 語とその初出としての**提示順序**を示す「早見表」として有益なはずである。アルファベット順での EP 巻末掲載のいわゆる索引ではない。点検に点検を重ね作成したが、EP I・IIで提示される各々の lexigram (レキシグラム・絵文字) とともに、Básic English の lexeme (語彙素) / lexical item (語彙項目) の**提示例**が本早見表で**瞬時にイメージ化**されることにもなるはずだろう。

ただ、EP で提示される各々の項目とその提示順等が本当に妥当か？ は今後、本早見表と索引の併用で追究されてよい。DM にさらに G が付く GDM で**提示順序**として何が先で何が後か、そしてそれは何故か？ の問題追究と、EP の見直し・再編成である。目下、本会 (東支部) の Newsletter でも毎月の連載で示唆しているが、Basic 語の真の意味での root sound / root sense (原音／原義) を求め、発生源としての Proto-Indo-European (PIE) [印欧祖語] の etymon (推定語根音素形) から、多くの words を **paronyms (同系語)** として一括提示する手法がある。synonym (類義語)・antonym (反義語) とともに、その重要性に気づいたときには遅すぎたとなつてはいけないのが、やはり **paronym への注目**である。ほんの 1 例であるが、window, wind, weather は paronym であり、こういうものを一括提示するのである。「近いものは近づけよ」ということである。この一括提示のための lexigram を composite lexigram (C. L. : 合成レキシグラム・合成画像文字) と呼んでおきたい (lexigram は、いわゆるイラストとは違う)。

EP I・II で上記 antonym (反義語) や前節で特別に焦点をあてた spatial particle (空間不変化詞) の提示順も頁が飛んでいるので再考されてよいと考える。spatial particle はユークリッド平面幾何学・非ユークリッド幾何学的な空間認知法からはゼロ次元空間 (点), 一次元空間 (線), 二次元空間 (面), 三次元空間 (立体) の順での提示がよかろう。at, on, in であれば点 → 面 → 立体でこの提示順がよいし, from, through, to であれば一次元空間の線としてこの提示順がよい (through は線上での「経路」の意味となる)。これら 6 語は点 → 線 → 面 → 立体から at → from → through → to → on → in の提示順が整然とした展開となる。EP ではその順序となっているわけではない。緻密な英語思考の基本となる spatial particle にさらに注目されるべきで、名詞としての語 point, line, plane, solid そのものも、この提示順がよかろう。関連して、GDM で function word (機能語) ばかりの注目をみるが、名詞・形容詞の **content word (内容語)** の扱いはどのように考えられているのだろうか？

算数・数学の背景に空間関係／順序関係／大小関係の 3 つがあるとされるが、ヒントとなろう。また、前節で言ったが移動事象 (motion event) の推移としての起点 (source)・経路 (path)・着点 (goal) から、すなわちモノの位置づけ・遠近関係・変化と変化の結果 (状態) の見方はニュートン風の運動力学とも重なる。さらに類似性 (similarity), 対比 (contrast), 比較 (comparison), 因果関係 (causal relations), そしてさらには事実 (fact) と虚構 (fiction) の関係からも見直されてよい。事柄の二分法 (dichotomy) の事実と虚構では、前者は Basic 語の be, 後者は seem で象徴もされるが、早い段階でこの 2 語は二項対立 (対比) で並列提示されてよかろう。また、部分 (part) と全体 (whole) の関係も再考の余地もあろう。with の導く重要な付帯状況 (attendant circumstances) の提示例も EP にはきわめて少ない。文が細切れすぎなもの気になる。より息の長いストーリー性があるといい (その点では検定本にはこれがある)。

なお、EP I・IIでの提示語の数は、Basic 本体の 850 語からは厳密には全部で 495 語となる。これは備考欄にも記したが、Basic では who からの派生からと考える what と which の 2 語を差し引き、さらに Basic 国際語彙の *automobile, bank, check, post, taxi* の 5 語を差し引いた 495 語である。表中で例を示したが Basic では、たとえば she, it, they, etc. は he からの派生と考えるわけで、EP I・II で提示される **Basic 語の数は 495 語 (+α)** となる。

また、EP III で提示される **Basic 語** はこれも調べたところ、本体の Basic 語としては 189 語であるが、やはり厳密には **189 語 (+α)** ということになる。EP I～III の **Basic 語の提示総数** は $495 + 189 = 684$ で **684 語 (+α)** となる。提示語の総数は (Workbooks は除き) 942 語 であるが、このうち III での提示語の総数は 447 語である。III では un-Basic 語 (非 Basic 語) が多く用いられるが、その数は $447 - 189 = 258$ となる。この 258 を 447 で割れば約 0.6、すなわち III での約 **6 割は un-Basic 語** である。また、I～III の全 EP で提示される **Basic 語と un-Basic 語の比率** は $684 : 258$ から、**ほぼ 3 : 1** の割合になるということも分かる。

いずれにせよ、上の一覧早見表は EP I・II 巻末の「索引」とは別に、**提示語と提示順序**、またその内容を心の中で鳥瞰的にイメージ化するのに未永く役立つはずである。ただ、EP は III を含めたセットであり、I・II から III への急激な飛躍も気になる。

筆者自身は Basic 追究者ではあっても GDM 実践者ではなく (I am a Básic English learner, not a GDM teacher.), EP 本を読みはするが GDM には特に興味はない者である (I am a reader of EP, but not specially interested in the GDM way of teaching English.)。難しすぎるからである (Because it is never a simple-to-do way of teaching English)。GDM 実践は **G としての語・状況文の提示順序と、その順序の理由が明確にされる必要がある** がこれが難しい。

lexical item の単発的な導入も本来ではないはずであるが、**単発的導入なら既習か未習かでその都度、前後の G の確認等も必要** であろう。ただし、算数・数学のような厳密で整然とした段階的 G の提示は難しい。また、D も単に日本語を用いない英語の文例提示でもない。DM は言語習得論 (language acquisition theory) と関わり、脳科学 (brain science) 的な neurolinguistics (神経言語学) などの研究成果が期待される。EP は特に他人からの教示なしでも Workbooks の併用で自ら考え、発見し、修めていく「自修」用に向いている。

EP 全体での提示語 (導入語) そのものも見直されてよいが、word (語) のレベル以外を排除して示唆するのがここでの趣旨ではさらさらない。EP I・II と III の間の関係も念頭に、上記 syntax (構文法/統語法) 等のレベルを含めてであるが、word も指示物を見せ**視覚的**に意味を示す ostensive definition (実物・連想定義) のみならず、新たな視点から**聴覚的**に音声との絡みからも root sense (原義) を感知する手法など追究されてよい。このあたりは、EP の背景ともなっている 17 世紀のチェコの教育者コメニウス (J. A. Comenius) に端を発するであろう intuitionism (直観主義) 的な教育観とも結びつく。

あとがき

EP (I・II) はつまるところ Basic, それもその語 (words) と語法 (wording) を扱い「語に始まり語に終わる」と思えるが、元来はこれは共著ではなく I. A. Richards の単著であり、1945 年に Pocket Books 社. から '*The Pocket Book of Basic English*' (by I. A. Richards) として世に出た。版によっては副題が *A Self-teaching Way into English* とされ、まさに自修・独習本と

してのものであった〔この副題では本稿で特別にその重要性を示唆した経路 (path) をも含む着点指定の空間詞 *into* とされており、単に着点 (goal) 指定の空間詞 *to* ではない〕。

上記書はいわゆる EP I・II の合作本で、self-teaching による English learning であり、自修用の初等英語教本ということになる。この書は The Shortest (Quickest) Way to English と銘打たれたもので、一通り手早く短期間での修得のはずのものであるが、GDM (Graded Direct Method) という教授法 (teaching) として実践するには、背景に Basic English そのものの言語哲学に関する相当な知見が前提となろう。




Basic は論理型で性別的には男性的、GDM は情緒型で女性的にも思えるが、英語のネイティブスピーカーで Harvard 大学の I. A. Richards や C. M. Gibson など専門研究者の真似は、日本生まれの日本育ちの日本人にはやはり現実的には決して容易ではない。このあたりは GDM の大きな欠点・盲点であるが、この一教授法としての GDM も最後の砦はやはり Basic であり、Basic の言語哲学のはずだろう。

単発的ではなく第 1 頁～最終頁を順序どおり、体系的に整然と step-by-step で、「語の真の意味 (sense) と用法 (use)」を教示するのに時間がかかるとすると、The Longest (Slowest) Way to English ともならないか？ EP を絶対なるバイブルのごときものとしては筆者はとらえていない。これを人に教示するとなると相当な留意が必要であろう。日本での GDM は本来の Harvard 大学のものとは扱い方が感情的 (emotional) にも、また身体動作に関わる科学的・キネシックス的 (kinesic [kini:sik]) な観点からも異質な形で入り、定着しているということはないだろうか？ Basic の初歩を扱うとはいえ、多分に Mickey Mouse 風のものも感じるがどうだろう。

今後は G の中身のさらなる追究とともに EP の見直し・再編成が考えられてよい。また教授法としての効能評価 (evaluation) では、ややもすれば日本人的な感情や主観的印象とは別に、時間をかけた客観的な科学的実験データ・統計処理等に基づく実証が望まれる。

参考文献

- 後藤 寛 (1997) 『850 語で考える英語』 (*English Made Simple*) pp.88-92, 松柏社
- 後藤 寛 (2003) 「BASIC ENGLISH と概念構造：事象分析からの意味記述」研究紀要 No.11, pp.8-22, 日本ベーシック・イングリッシュ学会 (名称は当時)
- 後藤 寛 (2004) 「語彙概念構造と BASIC ENGLISH 言語の統語法」研究紀要 No.12, pp.1-12, 日本ベーシック・イングリッシュ学会 (名称は当時)
- 後藤 寛 (2005) 「移動事象の関数構造と高次言語 BASIC ENGLISH」研究紀要 No.13, pp.8-19, 日本ベーシック・イングリッシュ学会 (名称は当時)
- 後藤 寛 (2006) 「記号論と Basic English：構造主義の視点から」研究紀要 No.14, pp.1-12, 日本ベーシック・イングリッシュ学会 (名称は当時)
- 後藤 寛 (2016) 『必携 最小限の語彙力で英語を読み、聴く方法：基礎語からの類推』 (*Getting the Root Sense of the Basic Words of English*), 松柏社
- 後藤 寛 (2018.06～) [目下継続連載中] 「語釈：インターネット Twitter 上でみる Trump 米大統領の英語 — *A Basic Way of Reading Trump-Language*」本会 (東日本支部用) Newsletter.
- Lockhart, L. W. (1987) *Basic Picture Talks*. The Hokuseido Press, Tokyo.



Richards, I. A. and Gibson, M. (1974) *Techniques in Language Control*. Newbury House Publishers, Inc., Massachusetts.

Richards, I. A. and Gibson, C. M. (2005) *English through Pictures* (Bks I, II & III). Pippin Publishing, Toronto.

岡本篤氏の授業

～高校 1 年生に対する疑問詞+to 不定詞の指導～

吉 沢 郁 生

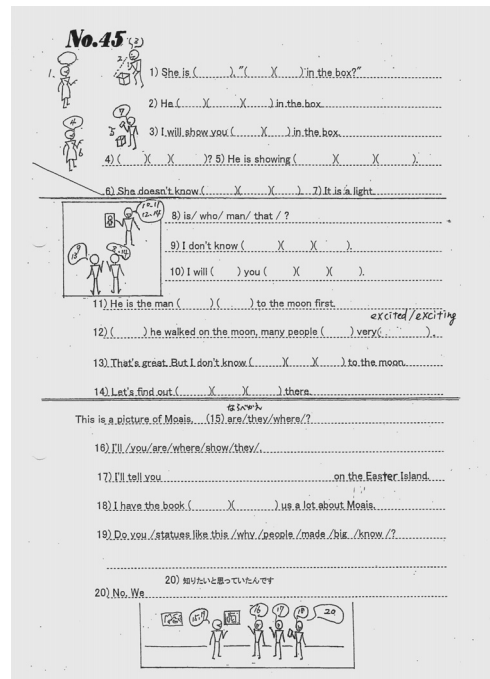
岡本篤氏は、名古屋経済大学附属市邨高等学校の教諭である。この授業は3学期も残り少なくなった2019年2月、高校1年生のクラスで行われた。市邨高校では1年生に対して、4月よりGDMによる授業を展開している。1学年は7クラス。前半は4クラス。後半3クラスは、習熟度により4クラスに編成している。今回の授業は後半のうちの選抜クラスである。生徒は27名である。

起立、礼の後、教師からの伝達事項がある。小テストをする予定だったが、延期することを伝えると「やったー」と喜ぶ生徒がいる。教師は、「テストという目標があるにしても」と言いながら黒板に○を描き、そこから下に線をのぼし、「大事なのはここ」と言う。テストに至るプロセスが大事なのだという主旨を話す。そして、So what is important is the way to the goal. OK? とする。(ここまで1分21秒)

ストップモーション

わざわざ英語で言っているのは、この授業で扱う way という語を意識しての前振りである。

「はい、じゃあ行きましょう。No. 45」と教師が言うと、生徒たちはファイルを開き、プリントを出す。「はい、ペアどうぞ」の指示で、生徒たちは机を寄せて隣同士のペアになり、答え合わせをする。頃合いをみて、「Are you ready? じゃあ行きましょう。」と教師は言う。



Please repeat from Number 1. と教師は言う。
教師が英文を読み上げ、生徒たちはリピートする。
She is saying, "What is in the box?"
He sees what is in the box.
I will show you what is in the box.
What is that?
He is showing what it is.

6 番までやり、残り 20 番までは各ペアで確認させる。教師は生徒の様子を見てまわる。時々立ち止まっては、聞き耳をたてるジェスチャーをする。頃合いをみて、プリントを回収する。(ここまで5分3秒)

ストップモーション

生徒の間を歩きまわり、生徒の様子を見ることを岡本氏は頻繁に行っている。生徒たちへの目配りの意識が感じられる。

生徒が作業している間に、教卓の上に箱をセットしてある。

OK, everyone. What do you see on the table? と問うと、I see the box on the table. と生徒たちは口々に言う。箱の中身が気になる。

What is in the box?

A map is in the box. と教師は言う。一人の生徒 A を手招きして教卓のところに來させる。箱の中の地図をとって黒板に貼ってもらうのである。その動作の一つ一つを、英語で表現していく。

教師にうながされて、生徒 A は、I will take the map from the box. 教師が She… と生徒たち全体に言うと、生徒たちは、She will take the map from the box. と口々に言う。

基本的に、当事者の生徒に言わせることと、その状況を他の生徒たちに言わせることを織り交ぜながら oral work が進んでいく。

生徒 A が箱から地図を取る。I took the map from the box.

教師は、それを黒板に貼るように身ぶりで示す。

生徒 A は I will put the map on the blackboard.

生徒が地図を広げ貼っている間、生徒たちは She is putting the map on the board. と言う。貼り終わって She put the map on the blackboard. と生徒たち。

「拍手。Thank you.」と言って、地図を貼った生徒 A に拍手を送る。(ここまで7分)

ストップモーション

事物や動作を自分の立場から発言すること、指名されて一人で言うときと全員で言うときとを区別する学習習慣が、4 月以来の GDM の授業で定着していることがわかる。

その地図は市邨高校の付近の地図である。教師は Where is Ichimura? と問いかける。自分たちの学校が地図のどこにあるのか、という話題に進んでいく。

教師は男子生徒 B を指名し、地図の所に来てもらう。が、分からない様子だ。

教師は Help him, Mr. Mizuno. Help him. と言って生徒 C を指名する。生徒 B と C は地図上を指しながら、これじゃないか、それともこれかな、というやりとりをしている。ようやく生徒 C は分かったようだ。「ここです。ここ。」と言う。

それを受けて教師は、Everyone. They showed where Ichimura is. と言う。

3名の生徒を指名して、英文を言わせる。その後、前に出てきている二人に You…とうながすと、二人は We showed where Ichimura is. 再び、生徒たち皆に言わせる。They showed where Ichimura is. 二人に拍手する。生徒たちも拍手する。教師は We are here. と地図上の学校のある所を指して言う。Ichimura is here. (ここまで9分39秒)

ストップモーション

Oral work での定着をはかるには、一人一人を指名して言えているかを確認していくことが必要である。岡本氏は全体に言わせた後に2~3名を指名する。時には、指名して言わせた後、再度全体で言わせるというふうに進めている。授業全体を通して、この手順が安定して行われており、生徒もそれに慣れている。

教師は、生徒 D を指名して地図の所に来てもらう。Please show me the way to Ichimura from Imaike Station と言い、with this pen. と言って、マーカーを生徒 D に渡す。しかし、すぐにルートを書き込めないでいる。

Help. Help. と教師はいう。教師は生徒 D へ近づき、誰かに手伝ってもらったらといったことを囁いているようだ。そして、生徒 E が呼ばれて、前にでていく。

生徒 E が D に教えている。教師はその姿を指して、他の生徒たちに向かって、Mr. Kato is showing the way to Ichimura. と言う。

4名を指名して言わせ、さらに全員に言わせる。

生徒 D は、言われたようにペンでルートを書き込んでいる。Yamaguchi-kun is putting the way to Ichimura. と教師は言う。拍手を受けて、二人は席に戻る。



Mr. Yamaguchi put the way to Ichimura.

Mr. Kato showed the way to Ichimura.

3名を指名。全員に再度、言わせる。

(ここまで13分36秒)

ストップモーション

学校の位置をさがしあてること、地下鉄の駅からのルートを書き込むこと。いずれも教師の予想より時間がかかっただろう。岡本氏は他の生徒に助けを求め、生徒たちに解決させるというやり方を選んだ。場合によっては、教師がさっと教えてしまうことも考えられるだろう。時間配分は大事な要素である。あくまで生徒自身に活動させたいとい

う教師の思いと、どう折り合いをつけるか。教師の判断が問われるところである。

話題がガラッと変わる。

教師は、Do you like a dog? と言いながら、紙袋から犬の写真を出す。教師が家で飼っている犬の写真である。This is my dog. It's called Icha. 生徒に向かって、Do you like dogs? と問いかけるが、No. という答えの生徒も多い。「猫派多いですね。」と言いながら、いろいろな生徒に聞いてまわる。

その写真を黒板の地図の横に貼る。そして、Today, let's make a dog. と言う。教室はシーンとする。何のこと? という雰囲気だ。再び教師は Let's make a dog と言ってから、袋から折り紙を取り出して with Origami. と言う。ああ、そうか、という声が漏れる。

教師が問う。Do you know how to make a dog? 知っている生徒はいないようだ。教師は、I will show you how to make a dog with Origami. と言う。生徒たちは、You will show how to make a dog with Origami. と言う。

2名を指名する。全体で再度言わせる。

教師は、折り紙を配る。一人2枚、取るように言う。紙が行き渡った頃、教師は言う。I will show you how to make a dog with Origami.

ストップモーション

岡本氏は、how to make a dog の to のピッチを高く発音していた。これは不自然である。不定詞 to が指導項目の一つで大事なものだから、という意識があったそうであるが、不自然なイントネーションはさけるべきである。

教師は、First, fold the paper in half. と言いながら、生徒の前で紙を折ってみせる。Like this. 生徒たちは折る。次、どうするのか。

教師は、Do you know what to do next? と聞くが、生徒たちは知らない。が、知っている生徒が一人いた。教師はその生徒を指して、He knows what to do next.

一つ折っては、次どうする? ということを繰り返して what to do next を練習しながら折り進めていく。最後、ペンで eyes, nose, mouth を描き入れて完成である。

生徒が折っている間、教師は見てまわりながら、時折、You made a dog. Is it easy? などと問いかけている。

頃合いを見て教師は全員に言う。I showed you how to make a dog.

Is it easy? Oh, it is easy.

生徒たち全員に、It is easy to make a dog. という文を言わせる。 (ここまで 23 分 53 秒)



ストップモーション

折り紙を折るという作業は、生徒一人一人全員が行うことができる。生徒全員を巻き込むには都合がよい。と同時に、折り紙そのものに関心が向いてしまって、言語学習がおろそかになる危険もある。そのあたりのバランスが難しい。岡本氏は頻繁に歩いてみてまわりながら、英語で話しかけている。

イヌを折った。次は何か。教師は Do you know how to make a cat? と問いかける。

生徒たちは分からない。そこで、教師はネコの折り方を説明した図を見せる。

This picture shows how to make a cat. そして、手順の番号を One, two, three, four, five, six, seven ... と数えて、This is the way to make a cat. と言う。

教師は説明の紙を配る。やや賑やかになる。

作業を一端ストップさせて、教師は言う。This paper shows how to make a cat. One, two, three, four ... This is the way to make a cat. 「はい、ペアで確認してみてください。」と指示する。生徒たちは、ペアで今のセンテンスを言い合っている。

イヌとネコ。折るのが難しかったか、やさしかったかという話題に進む。Is it difficult? と問いかける。生徒によって反応は違う。

It is difficult for Mr. Kato to make a cat.

It is easy for Herrori-san to make a cat.

「ちょっとペアでやってみよう。It is easy or difficult for…」と指示して、ペアで練習させる。
(ここまで 32 分 55 秒)

ストップモーション

クラスサイズが大きい学校現場では、どのように活動のバリエーションを組むかが大事になる。全体で言わせることと、個人を指名して言わせることに加えて、岡本氏はペアでの活動を取り入れている。学習ペアがしっかりと成立するのであれば、これは有効なやり方だと言える。

How about this? と言って、教師はもう 1 枚の図をみせる。生徒の視線が集まる。

It shows how to make a frog.

This is how make a frog.

There are eighteen steps to make a frog.

そして、I made it. と言って自分が折ったカエルをポケットから出して見せる。I made a golden frog. It takes a long time. It is not easy for me to make a frog.

Can you make a frog? It's not easy for me to make a frog.

さらに別の図を出して見せる。生徒たちは何だろう? という目で見ると。恐竜のメガロザウルスである。It shows how to make a megalosaurus. と全員に言わせる。

作り方はどうなのか。図を広げる。

How many steps? Thirteen? No. さらに紙を広げる。There are 40 steps to make a Megalosaurus. Is it easy? 全員で, It is difficult to make a megalosaurus.

その図を黒板の地図の横に貼る。地図と同じくらい大きな紙である。

It is very, very difficult for us (us を強調して) to make a Megalosaurus.

But と言って教師は別の紙を出して説明する。「これの元ネタですよ。元ネタが実はあって、これなんかインターネットから拾ってきたんです。こういうサイトがあるんです。『楽しく折ろう 高井君の折り紙教室』」



So, Mr. Takai is a origami master. I got this picture from his homepage. He know a lot about origami. He is very good at origami.

教師は, For him, is it difficult? とメガロザウルスの図を指す。It is not so difficult for him to make a megalosaurus. と全員に言わせようとするが, 声がばらけていて, しっかり言えていないようだ。「ちょっと言えるようにしよう。」と教師は指示する。生徒たち, 口々に言っている。It is very difficult for us to make a megalosaurus. (ここまで 37 分 48 秒)

ストップモーション

教師は, もっとしっかり言えるように練習させた方がよいと判断している。やり方としてはそれで良いが, なぜそうなったかも考えておくとよい。私は, ライブ・シチュエーションでの oral work に疲れてきたのではないかと、とも思った。折り紙だけでも, イヌ → ネコ → カエル → メガロザウルスと続いてきている。すでにライブだけで 35 分以上経過している。

教師は iPad を出して, 「サイバーキャンパス, ライブラリー。」と指示する。生徒たちは各自の iPad を出して立ち上げる。教師の用意したワークシートが画面に現れる。すでに生徒たちは手順を知っている。穴埋め式の問題になっている。「まずはブツブツ言ってみて。」と指示する。

教師は, iPad の画面に出ている文を板書する。

1. I will show you ____ ____ do next.
2. I showed you ____ ____ make a dog.
3. It is easy ____ ____ a dog.
4. But it is very ____ ____ a Megalosaurus.

「じゃ言ってみましょう。前を見て」と指示する。

教師は黒板の板書を指しながら, 全員に英文を言わせる。そして空欄に書き込んでいく。(ここまで 41 分 48 秒)

「じゃプリント行きましょう。」と言って、プリントを配布する。

教師は生徒の間を歩いて見て回る。「そうね。声出しながらやるといいね。」などと声をかけている。

「ヒント。」と言って、教師は英語で言う。I showed you a way to make a dog. And on his homepage, Takai-san's homepage, there is two or three ways to make a dog. So, this is one way. and this is ... And this is the easy way.

「No.10 これはちょっと言ったよね。Ichiro is a very good baseball player. So, he is very good at baseball. Mr. Takai ... is a very good origami maker. So, he is…」

「じゃ最後、みんなで確認して終わろうか。まだ終わってない人も流れに任せて言っちゃいましょう。」と指示する。1番から4番まで言ったところでチャイムが鳴る。「No.5 どうなるか考えておいて。余裕があったら右側もね。いろいろ書けそうですよね。じっくりやって下さい。」と指示した。(ここまで50分)



ストップモーション

書く作業をどのように位置づけるかも大事である。授業冒頭で、前回のプリントの答え合わせをし、授業の最後に新しい事項についての作業をiPadとプリントで行う、というふうに組み立てられている。

*

記録者の感想

岡本氏の授業で私が着目したのは、以下の3点である。

1つ目は、SEN-SITの原理に沿って、分かりやすく導入するための教材の準備がよくなされていることである。これは、松浦克己さんのサポートによるGDM名古屋グループでの蓄積も反映されているであろう。

2つ目は、自分のペースを持ち、切り替えていくテンポ感である。全体に言わせたり、指名して言わせたりする時の間合いもよいと感じた。

3つ目は、生徒一人一人への目配りの意識である。頻繁に生徒のあいだを歩きまわり声をかけている。堅苦しくない。授業者自身がやりとりを楽しんでいる。

今後の課題としては、まず、音声面で教師自身がしっかりしたイントネーションを身につけていくとさらによくなると感じた。次に、今回の授業は *English Through Pictures* の grading からはずれた項目について、SEN-SITを応用するという仕方で行われている。Showという動詞を扱う場合、「show+物」でいくのか、「show+人+物」でいくのか。それが授業の中では、やや曖昧だった。教師は後者で発話しているが、生徒の方は「人」を省いて言っていたりしていた。おそらく、そのあたりまでは突っ込まないという意図があったのだろうと推測するが、

突っ込まなくても教える側としては頭の中で整理しておく必要はある。EPのgradingをはずれてfull Englishに踏み込むと、このあたりが難しくなる。

今回、岡本氏には4限目の授業を参観させていただいた後、5限目にその授業の振り返りをした。岡本氏はそれを踏まえて6限目の授業にのぞみ、その後映像を見ながら検討を行った。私自身、授業をすることの難しさと面白さ、それを解きほぐしていくことの喜びを経験した。授業を見せていただいた岡本篤氏、継続的に市邨高校のGDM授業をサポートしてきている松浦克己氏、そして会場の提供と撮影などで協力していただいた市邨高校の英語科スタッフの方々に感謝いたします。

〈注〉

本稿の授業記録は、NPO 授業づくりネットワーク（元教科研授業づくり部会）の開発した「ストップモーション方式による授業記録」の形式をもとにしている。

◆◆◆東日本支部活動報告◆◆◆

(2017年8月～2018年7月)

■2017年

8月13～15日	夏期英語教授法セミナー	オリンピック記念青少年総合センター	
9月2日	月例会	三田いきいきプラザ	
	デモ	Which (rel.) (EP 1 p.50)	伊藤千津子
	Basic	Basic English/200 Pictured より (H, I, J, K)	
10月28日	月例会	三田いきいきプラザ	
	デモ	may be (EP 2 p.87)	多羅 深雪
	Basic	Basic English/200 Pictured より (L, M, N)	
11月18～19日	GDM 秋のセミナー	邦和セミナープラザ	
12月23日	月例会	東京芸術劇場会議室	
	デモ	attraction (EP 2 p.85)	服部 正子
	Basic	Basic English/200 Pictured より (O)	

■2018年

1月13日	月例会	神奈川県民センター	
	デモ	keep from (EP 1 p.98)	黒瀬 るみ
	トーク	「新学習指導要領の矛盾と問題点」	中山 滋樹
2月3～4日	ベーシック・イングリッシュワークショップ／月例会	オリンピック記念青少年総合センター	
	デモ	“The Story of Higher Beings in Egypt”	小林 由明
	デモ	“A Strange Fish”	
		The Basic Reading Books BK 2 pp.14-16	松川 和子
3月25日	月例会	目黒区勤労福祉会館	
	デモ	one of ～ (EP 1 p.47)	岡本美津子
	Basic	Basic English/200 Pictured より (P)	
4月7日	GDM 教師養成コース	津田塾大学同窓会会議室	
	デモ	英語以外の外国語体験	黒瀬 るみ
	デモ	I, You, He, She, It, here, there まで	唐木田照代
	レクチャー	GDM の理論	新井 等
		グループワーク	
4月22日	GDM 教師養成コース／月例会	オリンピック記念青少年総合センター	
	デモ	This, That, a, my, your, his, her	加藤 准子
	レクチャー	授業の組み立て方	唐木田照代
		グループワーク	
5月12日	GDM 教師養成コース／月例会		

	オリンピック記念青少年総合センター	
	デモ in, on, the	伊藤千津子
	レクチャー 教材, 写真, 絵について	黒瀬 るみ
	グループワーク	
5月26~27日	GDM 発音ワークショップ	
	オリンピック記念青少年総合センター	
6月3日	GDM 教師養成コース すみだ産業会館	
	参加者の授業	
	デモ take	伴野 温子
	グループワーク	
6月16日	GDM 教師養成コース/月例会 すみだ産業会館	
	参加者の授業	
	デモ have, has	服部 正子
	実践報告	松浦 克己
7月21日	月例会/総会 目黒区中小企業センター	
	デモ seem (EP 2 p.103)	服部 正子
	総会	

◆◆◆西日本支部活動報告◆◆◆

(2017年9月~2018年8月)

■2017年

9月9日	月例会 大阪市立総合生涯学習センター	
	デモ of (EP Book 1 pp.26-27)	山崎 典子
	トーク 「自習書としてのEP」	飯嶋 良太
10月21日	月例会 大阪市立総合生涯学習センター	
	デモ① What? (Book 1 p.30)	麻田 暁枝
	デモ② Book 3 p.8	上島 光代
11月18~19日	In some countries there is little land for the size of the population.	
	GDM 秋季セミナー in Nagoya 邦和セミナープラザ	
12月16日	月例会 大阪市立総合生涯学習センター	
	デモ ever (Book 2 p.67)	松川 和子
	Reading Workshop	吉沢 郁生

■2018年

1月28日	月例会 大阪市立総合生涯学習センター	
	デモ① make (Book 1 p.91)	麻田 暁枝
	デモ② EP 3, p.15	此枝 洋子

2月18日	月例会	大阪市立総合生涯学習センター (導入部分を見せてほしい, という依頼を1月に受けて)	
	デモ①	I, You, He, She, It / here, there	上島 光代
	デモ②	This, That (EP 1, p.8)	河村有里子
3月17~18日	初級・中級セミナー IN KYOTO / 月例会	ザ・パレスサイドホテル (京都)	
4月7日	月例会	大阪市立総合生涯学習センター	
	デモ	which (relative) (EP 1, p.50)	河村有里子
5月20日	月例会	大阪市立総合生涯学習センター	
	デモ①	I, You, He, She, It	河村有里子
	デモ②	in / on (EP 1, 11)	此枝 洋子
	デモ③	GDM の理論	山崎 典子
6月18日		大阪北部地震のため中止。	
7月15日	〈GDM 初級セミナー〉	大阪市立総合生涯学習センター	
	(1) 模擬授業 : ①I, You, He, She, It		河村有里子
	(2) 模擬授業 : ②here, there		麻田 暁枝
	(3) GDM の理論		山崎 典子
	(4) 参加者トレーニング		
	(5) This, That (EP 1, p.8)		松川 和子
	(6) in / on (EP 1, 11)		此枝 洋子
8月11~13日	総会	GDM 英語教授法サマーセミナー	
		国立オリンピック記念青少年総合センター	

◆◆◆編集後記◆◆◆

ここに IDEAS FOR GOOD サイト読者へのアンケート調査結果があります。【<https://ideasforgood.jp/2019/05/22/corporate-site-millennials/>】社会・環境・教育・経済課題に関心が「大変ある」「ある」（合計 77%）のですが、社会課題解決に貢献している企業から商品・サービスを購入するか？ について「大変意識する」「意識する」（合計 35%）という結果となっています。では、どんなときに企業サイトを見るのか、は「仕事で情報を得たいとき 57%」「就職・転職活動のとき 55%」（他はキャンペーンがあったとき、店舗をさがしたいとき）。また就職活動では、社会課題解決に積極的な企業であることを意識するかどうか「大変意識する」「意識する」（合計 68%）という結果が出ました。Sustainability を意識して働き場所を探すミレニウム世代・デジタルネイティブ世代はどんな企業を支持するのか？ IDEAS 編集部が抽出したのは Purpose/Authenticity/Design の 3 つのキーワード。すなわち「何のためにこの会社があり、何のために事業をするのか、その企業の“想い”がストーリーとして伝わるか」「ありのままを見せる、背伸びしない（⇔よく見せる）」「デザイン性を大事にする（機能的価値より情緒的価値を重要視）」、でした。

『GDM 英語教授法研究会』は 1952 年から GDM 講習会を開くようになり、毎年セミナー・月例会を継続してきました。その先人の方々に感謝と心からの敬意を払います。何のためにセミナー・月例会をするのかといえば、英語を学ぶ人たち/教える人たちに GDM 教授法を使って英語を教えたいからです。ではどうして GDM 教授法で英語を教えたいのでしょうか。また『日本ベーシック・イングリッシュ協会』はどうして勉強会を継続しているのでしょうか。

片桐ユズルさんからお聞きするのは C. K. Ogden が Basic English を作った時代背景です。それは第 1 次世界大戦が終了したときだったと（1930 年）。戦争を起こしてはならないという反省があったのではないかと。戦争を避けるためには対話が必要。英語を母語としない者が、英語で自分の考えを表現することが可能な語彙、それが 850 語から成る Basic English だった。それは分析的に、明確に、知的に表現するのに必要な語を選んでできているので、多義的・曖昧な言い方はできない。つまり対話するのに最も適した語体系だった。そうした英語体系である Basic English を基に I. A. Richards は、10 年以上の研究と実験を重ねて GDM 英語教授法を開発したと。これはユズルさん自身の戦争体験と重なっているお話でもあります（ユズルさんは Basic English が作られた思想とその背景についてもお話されています。文章としては日本ベーシック・イングリッシュ協会サイトの室勝「Basic English の成立」をご参照下さい。http://basicenglish.undo.jp/basic_english_no_seiritsu.html）。

私は思います。地球の Sustainability を二人の巨匠は考えてくれたのだな、ということ。すごくクール、です。「教育に関心がある」人に響く「Our stories」を Web 上で発信できないでしょうか。「伝わる文章」術を学びたいと考えている今日この頃です。

（山崎典子）

